

真実の礎 10 話

編集者まえがき

今回は『真実の礎』第十九話: バットの告白とジャミルの憂鬱、第二十話: ある女性秘書の死 前編、第二十一話: ある女性秘書の死 後編、21.5 話 「怒その 2」、第 22 話: 国連秘密諜報機関『ソレスタルビーイング』、22.5 話「」、第 23 話: 一筋の希望(いずれも Neutralizer 作)を再編集させていただきます。

1

「…そうか、もはや『黄色い馬』どころか『シルキーキャンディ』まで流行りだしてしまっているのか…」

「ああ、札幌市長選挙でもそれがきっかけで若手の候補が逮捕されたそうさ。尤も哀れな事に後ろ盾から見捨てられたがな」

五車星出版社で主だったメンバーが今まで取材してきた事をまとめながら話し合っている。

「ケン、『元斗会』の連中が盗聴器仕掛けてたっていう話は聞いたか？」

「ああ、だが確たる証拠が出ず不起訴同然になった事もな」

「あの『マボロシクラブ』にしてもそうさぜ。結局あの札幌ゼネコン事件でクラブそのものの関与しているかどうか分からすじまいなうえに従業員数人が逮捕されただけで終わったからな、そいつらの仕業という事で」

拳志郎、ジュウザ、バットが話し合っているところに

「ねえケン、これからどうするの?もっと確信的な情報が必要だし…」

とリンが不安な面持ちで言う。

「そうだな、やはり奴らの懷に乗り込むしかないか」

「懷か…壬生とゼーラだな」

「ああ、すぐにでも準備をしよう。編集長、そういうわけで…」

「分かった、行ってきたまえ。私もいろいろ情報を集めてみよう」

「ありがとうございます、よろしくお願いいたします」

「気をつけてくれ。奴らの事だ、必ずなんらかの罠や暗殺手段を使うからな」

「ええ、我々として命がけの仕事である事は重々承知です」

「うむ」

「ケン、俺はここに留まって馬と飴のルートを調べる」

「ああ、頼むぞジュウザ」

「任せとけて」

と拳志郎以下それぞれの行動の打ち合わせが終わると

「バット」

と拳志郎がバットに声を掛ける。

「ん?なんだいケン」

「今夜、飲みに行かないか。お前と久々に飲み明かしたいのだが」

「おっ、珍しいね。ケンが誘ってくれるなんて」

「場所はいつもの所でいいか？」

「ああ、『桜都』ね。いいぜ、俺ん家の近くだからな」

「ケン、私もいいかしら」

とリンが言うと

「すまないリン。今夜はバットと二人で話したい事があるんだ」

と拳志郎は言う。

「何だよ、リンも一緒にいいじゃねえか」

「いや、お前とだけで話したい事がある」

「う〜ん…しょうがねえな。リン、悪いけど先に帰っててくれないか。ケンがああ言うからさ」

「分かった。ケン、今度飲みに行く時は私も誘ってね」

とリンが言うと

「ああ、分かった。約束する」

と拳志郎は彼女に笑顔を向けて答えた。

「いらっしやいませ…拳志郎さん!お久しぶりですね」
バー『桜都』のマスター李小狼(リー・シャオラン)が店に入ってきた拳志郎とバットに笑顔を向ける。
「やあ、小狼。相変わらずだな」
「ハハハッ、それは拳志郎さんも同じ事じゃないですか。連合国中を走り回っていますから」
「フッ、そうだったな」
と言いながら拳志郎とバットはカウンターの椅子に座る。
「あ、拳志郎さん。いらっしやい」
と奥から小狼の妻さくらが現れた。
「やあ、さくら。お父さんから事件の事は聞いてるね」
塔和大の事件の事である。
「はい、その事でお父さんから知り合いのジャーナリスト達に調べてもらうよう頼まれました。友世ちゃんも手伝ってくれるそうなので」
「そうか、いい友達を持ったな」
「ありがとうございます…ところで世津子ちゃんの彼氏の具合はどうなのですか?」
とさくらが心配そうな顔で拳志郎に尋ねると
「今のところは禁断症状は少しずつ収まっているそうだ。だが麻薬所持の罪に服す事になるが…」
と彼は答えた。
「そうですか…少しでも罪が軽くなるといいですね」
とさくらはホッとした表情で言った。
「小狼、いつもの奴を頼む」
「はい、かしこまりました。バットは?」
「俺もケンと同じ奴で」
「かしこまりました」
と小狼は言うと言戸棚から一本のウィスキーボトルを出し二つのグラスに氷を入れ、ウィスキーを注いで二人に出した。

しばらくウィスキーを飲みながら小狼・さくらと交えて談笑した頃…。
「バット」
と拳志郎はバットに真顔を向けた。
「な、何だよ」
とバットが彼の顔を見て少したじろぎながら答える。
「お前、俺に何か言いたい事があるのではないか?」
「い、いや別に…」
「そうか、俺が福岡から戻ってきてお前が調査に出かけた時に俺に向けた顔の表情が曇っていたが…」
「……」
「すまん、どうやら俺の気のせいだったようだな」
と拳志郎が表情をゆるめて言うと
「…ケン」
とバットが表情を少し曇らせながら言う。
「何だ?」
「やっぱケンには敵わねえな。俺が隠してるつもりでもほんの少しの事で見抜いちまうんだからさ」
「……」
「なあ、ケン。正直に言うよ、でないと俺このままずっと言えないまま引きずっていく事になってしまいそうだから…」
その言葉に拳志郎は黙って頷いた。それを見てバットは自分が思っていた事をゆっくりと喋り始める。
「ケン…あのさ、俺…」
「……」
「俺、リンと結婚してよかったんだろうか…」
「バット…」
「俺、分かってるんだ。リンは…リンが本当に好きなのはケン、アンタなんだって」
「そ、そんなバット。今更何を」
と小狼が言うと言拳志郎は彼に無言で片手を挙げて黙って欲しいという仕草をした。それが分かったのか小狼は心配そうな顔で黙る。

「リンとはあの十年前からオーブの孤児院で親しくしていたからさ、リンがケンに恋心を抱いているのは分かった。だから…こんな事言うとケンが怒るかもしれないけどリンに…リンにふさわしいのはアンタだって…」

「バット」

拳志郎はバットが言い続けようとするのを遮る。彼の一言は静かだが重い口調だった。

「……」

バットが黙ると拳志郎は彼の両肩に両手を添え、静かにそして彼を諭すような口調でゆっくり言い始めた。

「俺は言った筈だぞ。リンの愛を受け入れられるのはお前しかいないと」

「ケン……」

「そのお前がリンを受け入れないでどうする」

「しかし……」

「受け入れろ、お前なら彼女を幸せにする事ができる。俺はそう信じている」

「ケン、アンタ…まだユリアさんの事を……」

「……」

拳志郎は黙り込む。バットもカウンターに向いて俯いた。

「バット、君は幸せ者だよ」

沈んでいたバットに小狼が話しかける。その言葉にバットは顔を上げる。

「君は拳志郎さんに見守られているじゃないか。君やリンの事をいつも気にかけてくれる人がいるってすごく幸せな事だと俺は思うよ」

「そうだよ、私も小狼の言うとおりだと思うよ」

とさくらも小狼の言葉に同調する。その言葉にバットはぎこちない笑顔で少し頷いた。

「さて、帰るとするか。バット、お前は どうする？」

と拳志郎は尋ねるがバットはそれに答えず黙ったままだった。

「まあいいか、ゆっくり悩んでみろ。お前なりの答えが出るかもしれないからな。小狼、お勘定を」

と拳志郎はバットに笑みを向けてそう言うとお金を支払って店を出て行った。

後に残ったバットはまだ悩んでいる表情だった……。

拳志郎とバットがバーで酒を飲んでいた頃、アメリカ合衆国では朝を迎えていた……。

ここは首都ワシントンD.Cにあるホワイトハウス。現アメリカ大統領ニコラス・J・ベネットは朝食を終え、マクラーレン副大統領と大統領特別補佐官ジャック・ターナーを交えて話していた。無論、壬生国の事についてである。

「大統領、壬生国の選挙があと十日と迫りました」

とマクラーレンがベネットに報告する。

「ウム、その線は君の娘婿からかね？」

とベネット。

「ご冗談を、外交筋からですよ」

とマクラーレンが笑いながら答える。その場にいたターナーも笑いを噛み殺す。

「フッフ、あの国は今我が国にとって友好国になる。あのフクゾウ・モグロという男には感謝せねばな」

「はい、彼の政党『公平透明党』は組織票に関しては有利ですから期待できます」

「補佐官、期待では困るよ。確証でなければ。だが、過去に危険なナショナリズム体制でわが国と戦った時の記憶が日本という国に残っておる。その記憶が彼の政党を後押しする筈だ」

「同感です大統領。因みにあの男こんな言葉を口にしているそうです」

「ほう、何て言っているのかね？」

とベネットがマクラーレンに尋ねる。

「彼はこう言っています。『今日も勉強、明日も勉強、愚かな人間に生きる資格なし、この世は天才だけの物、天才の中の天才はアメリカ、この世を治めるのはアメリカ』と」

「ほう、素晴らしい言葉ではないか。もし、彼が生粋のアメリカ人であるならば閣僚に抜擢したものを」

「はい、大統領。彼はわが国が世界の覇権を担う国であると自覚しているようすな」

「うむ」

ベネットは頷く、が

「ターナー補佐官、壬生国はそれで良いとして日本国内全体はどうなのだ？」

とターナーに尋ねる。

「はい、大統領。今のところは関東連合はモグロ支持に回ると思われます」

「その理由は？」

「はい、かの国の議長ギレン・ザビは壬生国に影響を強めるのが目的でありその為に彼と秘密裏に手を組ん

でおるそうです」

「成程、確かあの国はオーブと対立しているな。オーブの動きはどうなのだ」

「はい、先日ウェールズのパトリク国王がキラ・ヤマト国王と会談したそうですが彼らはわが国に警戒感を強めている模様です」

「うむ、あのパトリク国王も油断がならぬ。何を考えているか分からない時がある」

「実はそのオーブの事です。ヒロシ・タカノなる人物が裏で暗躍しているという情報が入っております」

「あの男か…」

ベネットは眉を顰める。

「大統領、どうかされましたか？」

とマクラレーンが尋ねると

「いや何、個人的な事だ。補佐官、続けたまえ」

「はい、それ以外のところでは今のところ目立った動きはありません」

「そうか、国連は日本をどう見ている？」

「はい、壬生国の政治システムに興味を持っているようです。ただ、わが国寄りになる事には懸念を抱いていると」

「ジャミルめ、国連の中心はわがアメリカである事が分かっていないようだな」

「はい、彼は前事務総長であったアダムズ氏の意思を引き継いでいますから」

「フツ、まあいい。世界の主導権はわがアメリカ合衆国でなければならぬ。そして、パクス・アメリカナの下にいてこそ日本連合国という国が発展できるという事を分からせなくてはな。副大統領、君の娘婿のフクジロウに伝えてくれ。もし、君の兄が壬生国の政権を取ったあかつきにはわが国は壬生国と友好条約を改めて締結する用意があると」

「はい、必ずお伝えします。大統領閣下」

マクラレーンとターナーが部屋を出た後、ベネットが椅子から立ち上がり窓の外を見ながら言った。

「ヒロシ・タカノ…私の息子マルスをねじこめた男よ、お前の手並みをみせてもらおうぞ。だが最後に笑うのはわがアメリカだという事を忘れるな。そしてジャミル、これからわが国が世界の中心でなくてはならぬのだ…」

一方、そのジャミル・ニート国連事務総長はニューヨークにある国連本部の一室から外を眺めながら一人思考に耽っていた。彼はアイルランド出身であるが母国の対岸に位置するアメリカのやり方に不満があった。

(作者註: 国連事務総長は世界各地から順に大陸ごとに選出される事と安全保障理事会常任理事国以外の国から選出される事が慣例となっている。: Wikipedia 日本語版より)

(ベネット大統領、お前はいやアメリカは未だに覇権を握り続けようとしているがその為は何力国かが不満に思っているのが分からないのか。十年前のテロといい、2001年に起きたあの自爆テロといい、それはお前達アメリカのやり方が高圧的だからこそ招いたのだ。もっと昔に遡るならベトナムの時もそうだ。なのに何故覇権に拘る、そんなに覇権を失うのが恐いのか…。)

「事務総長」

彼の秘書であるサラ・タイレルの声でジャミルは我に返り、彼女に顔を向ける。

「サラか、どうした？」

「ジーナス事務次長が面会を求めています…」

「会おう、通してくれ」

「はい、かしこまりました」

彼女は部屋のドアを開ける。入ってきたのはマクシミリアン・ジーナス事務次長(愛称: マックス)とその妻であるミリアであった。因みにミリアも国連機関の一つである女性の向上のための国際訓練研究所(通称: INSTRAW)に勤めている。

「事務総長、『死神』を派遣したというのは本当ですか!？」

とマックスは顔を少し陰くしてジャミルに尋ねる。

「ああ、本当だ事務次長」

「何故です!? 彼らは危険すぎます!! それに日本連合国内の問題にそこまで足を突っ込む事はないではありませんか。それでは我々の不当な干渉になりかねません!!」

とマックスはジャミルに詰め寄る。

「確かに君の言うとおりかもしれない。しかしだ、麻薬委員会のバートン委員長から思わぬ情報が入った。加えて彼らの司令官であるエドガー・ラディゲからも派遣要請が矢継ぎ早に來た。君のほうに先に相談しておくべきだったと思っているが…」

ジャミルは沈痛な面持ちで答える。尚、麻薬委員会のフィリップ・バートン委員長はユーロ議会議長デギム・

バートンの弟である。

「総長、その思わぬ情報とは？」

とミリアが尋ねると

「ウム、その麻薬委員会からの報告によると今その国内で中国・ロシアのマフィアがリブゲートなる企業と結託し麻薬を広めているようだ」

「えっ!？」

ミリアは絶句する。

「ですが総長、彼らの中に殺人狂的性格を持つ者もいると聞きます。彼らの暴走を止めるためにも『魔道師』の派遣を要請します」

とマックスは言った。

「彼らをか…」

「はい」

「分かった、バートン氏を通じてラディゲに任務を忠実に遂行し余計な人物を巻き込ませないよう念を押しておこう。無論、『死神』の監視のためにも君の提案を許可する」

「ありがとうございます」

マックスは礼を言う。がまだ表情は強張っていた。

「指令は私が直接出す。サラ、『エピオン』に『MS(モビルスーツ)』を出撃させるよう連絡してくれ」

「はい」

「マックス君、実を言うと『死神』の派遣は私も最初は反対した。なるべくなら彼らの悪行を白日のもとにさらし日本連合国政府に裁きを任せるつもりであった…」

「総長、でしたら何故…」

「日本国連合内の結束が弱いうえに中にはマフィアを利用して権力を握ろうとする輩がいるというラディゲの報告があった。まさしく権力闘争と化してしまっている。加えて…」

とジャミルはそこで説明をとぎる。

「加えて…何です？」

とミリアが続きを促すと

「総長のお嬢様がアイヌモシリ共和国で麻薬中毒者に襲われそうになったのです。幸いにも日本の警察によって難を逃れましたが…」

とサラが変わって説明をする。

「サラ、それは個人的な事だ」

「ですが総長…」

「…そうでしたか」

マックスは強張った顔を崩し普通の顔になる。

「そういう訳だ、そういえば君達の娘…確かミレーヌと言ったね、彼女は今どこに？」

とジャミルが尋ねると

「娘は今ヨーロッパ縦断ライブツアーをやっています。かなりの人気でして」

とミリアは苦笑しながら答える、そのミレーヌは世界的に人気があるロックバンド『FireBomber』のボーカル兼ベースである。

「そうか、彼女のバンドは日本で公演する予定があるとは聞いているかね？」

「いえ、そのような予定は聞いておりませんわ」

「ならばいいが…君達とて自分の子供が麻薬中毒になるのは耐えられまい」

「はい…」

「ラディゲにも同じような事を言われたよ、それにバートン委員長も子供の一人在麻薬中毒になってしまっている、それ故私に『死神』の派遣を強く要請してきた。彼も自分の子供のような人間を増やしたくないのだ、分かってくれ」

ジャミルのその言葉にマックスとミリアは無言で頷くと部屋を出て行った。ジャミルはまた窓の外を眺める。その顔は憂鬱な表情であり、こう呟いた。

「我々人類という生物は…なんと悲しき生き物なんだ…。快楽に溺れ、力に憧れる事が絶滅への近道だと分かっているながらその道から抜け出そうともしないのだから…」

「…ほう、来たか」

一人の男が書類に目をやりながら言う。

「我々の出番がきたな、では各 MS に伝えてくれ。ミッションが下った、行き先は日本国連合だと」

男は傍らにいた眼鏡をかけた女に言う。
「かしこまりました」
果たしてこの二人は何者であろうか…?

2

拳志郎達が壬生国とゼーラ帝国に向かって出発した日、東京のとあるセレモニーホールである一人の女性の葬儀がしめやかに行われていた。

彼女の名は冥王せつな、秘書である。死因は飛び降り自殺であるがこの女性の死には一つの噂があった、ある政治家の陰謀に巻き込まれ謀殺されたという噂である。何故なら彼女を秘書にしていた政治家というのがあのシャギア・フロストだったからである…。

葬儀が行われているセレモニーホール…外は彼女の死を悲しむかのように小雨が降り会場の中では読経の音が聞こえる…。

「うっ…うう…せつなさん、どうして…」

「……」

葬儀の席で泣いているのはせつなの高校の後輩であった地場うさぎであり、その彼女の肩に手を添えて無言で慰めているのはうさぎの夫、衛である。この葬儀の席には二人だけでなく、同じくせつなの後輩でありうさぎの親友である火野レイ、木野まこと、あのサザンクロス病院研修医である水野亜美、アイドルの愛野美奈子、先の五人にとっては先輩にあたる天王はるか、海王みちるが来てせつなを悲しんでいた。因みに天王はるかはゴッドフェニックス運送の配達員、海王みちるはシチズンオーケストラのメンバーでありバイオリンを担当している。

「あの人自殺だなんて…絶対信じない!」

とはるかが言う。

「そうですよ、はるかさん!せつなさんは殺されたに決まっています!」

とレイもはるかの言葉に同調し、一同は頷く。そこへ焼香を終えた美奈子が戻ってくる。

「美奈子、貴方はせつなさんの死をどう思う?」

とレイが尋ねると

「私もせつなさんが自殺だなんて信じられない。実はみんなには黙って欲しいってせつなさんに言われたけど、私あの人から相談を受けていたの」

と美奈子は思いがけない事を口にした。

「えっ!」

その場で聞いていた一同は驚く。

「確か…そう札幌でゼネコン事件が起きた時だったかしら…せつなさんが私のところに電話してきたの。『私、もしかすると見張られているかもしれない』って。その時は半信半疑だったけど声からして不安そうだったから何があったのか訊いたの」

「そしたら、せつなさんは何て答えたの?」

とまことが尋ねると

「『ごめんなさい、今は詳しい事は言えないわ』と言ったの、理由を尋ねたけどあの人仕事の合間をぬって電話してたから『また電話する』って切られたの」

「恐らく何かとんでもない事を知ったんだろう」

と衛が言うと

「そうよマモちゃん、きっとせつなさんはそれで殺されたのよ!あの男に」

とうさぎがハンカチで涙を拭きながら言った。

「じゃあ、次は私…かな」

と亜美がポツリと言うと

「え!?亜美ちゃん、どういう事?」

とうさぎが彼女の言葉に反応する。

「私も前にみんなとあった時に言えなかった事があるの。ほら、私が勤めている病院の噂を知ってるでしょう?そこで薬害疑惑があるって…」

「ああ、あれね。まさか、貴方まで巻き込まれたって言うの?」

「というより問題の血液製剤の事をインターネットで見た時にショックを受けたのよ。それでその不安を病院内で私が慕っている外科医に打ち明けたの」

「それで?」

「そうしたらその先生は義兄さん、ほら私の姉さんが結婚しているのは聞いてるでしょう?その義兄さんに会い

たいて言ったのよ。病院のやり方に我慢できないって。でも…」

「まさか断ったの?」

「違うわ!実はその先生と私、病院を経営する元斗会に目をつけられていたのよ。その証拠に盗聴されていたわ、先生のノートパソコンのバッテリーに盗聴器が仕掛けられていたの。幸いにもスクラッチエージェンシーの人が犯人を捕まえてくれたうえに盗聴されている事を教えてくれたからよかったけど…」

「そういえば亜美ちゃんの事が週刊北斗に載っていたからビックリしたよ、デカデカとね」

「だから私もこの場でみんなに言えるの、私もあの病院の不正に立ち向かうって事を。ただし私に何かあったら…」

「お前までそんな事を言うな!!余計悲しくなるじゃないか…」

とはるかが亜美の言葉を遮って言うと

「はるかさん、気持ちはうれしいけど私もう薬害の事を知った以上、私も命を狙われている事も事実なのよ。だからみんなお願い、さっき言った外科医の名前は伝通院洸というんだけどもし私に何かあったらその人に協力してあげて。そして薬害疑惑を晴らして欲しいの、これだけは言っておきたいから…」

と亜美は悲壮な決意を込めて頼んだ。聞いていた一同は無言で頷くしかなかった…。

この葬儀には様々な訪問客が来ていたがその中の何人かはうさぎ達に関わりがあった。

最初に来た人物は…

「あ、噂をすれば来たわよ」

とみちるが目を向けた先には問題の人物シャギア・フロストがいた。彼はうさぎ達の方に歩いてくる、彼女達は怒りの表情になった。

「やあ、どうも皆さん。この度はご愁傷様です」

とシャギアが悔やみの言葉を言うと

「あら、それは大そうご挨拶ね」

とレイが平静を装いながらも彼を睨みつけ、皮肉を込めて言葉を返す。

「私も彼女がこんな事になるとは思いませんでしたよ。優秀な秘書だったのに…」

「へえ、そういう言葉を平然と言えるんだな」

とはるかもレイと同じような態度で言う。いや、はるかだけではない、その場にいた一同もそんな態度をとるような雰囲気だった。がシャギアはその雰囲気を察しないかのごとく

「おやおや皆さん、随分陰い表情ですね。私が何か失礼な事でもしましたかな?」

とさりと言うと

「だったらせつなさんの遺影の前で自分の胸に手を当ててみなさいよ!そしたら私達の言っている意味がわかる筈よ!」

とレイが怒りを込めて返す。

「私達には分かってるんだからね!せつなさんはアンタに殺されたんだって!」

「困りましたねえ、どこにそんな証拠があると?」

「今は無いわよ!でもね、あの人は自殺なんかするような人じゃないわ!それにアンタには黒い噂が絶えないのよ、せつなさんはアンタの悪巧みを知って殺されたのよ!そうに決まってる!!」

「はて、それは事実無根というもの。それに人間分らないうちに疲れが溜まってくる時があるものです。彼女も何かで疲れたんでしょう」

「アンタの悪巧みに苦しんでね!!」

「いや、参りましたなあ。どうやら私は貴方達に嫌われているようだ」

とシャギアは頭を軽く掻きながら言うと

「そういう事です、私達は貴方から香典をいただくつもりはございません。焼香がまだお済みでないならそれを済ませてお引取り願います」

とみちるは慇懃無礼に言った。

「…そうですか、ではそうさせていただきますか」

とシャギアはすました顔で彼女達から離れ、焼香をしに向かった。

「何なのよアイツ!!自分の事を棚に上げて!!」

「そうよ、アイツが帰ったら表に塩撒きましよ、塩を!!」

一同は息巻いた。

その次に彼女達の前に現れたのは…

「天馬!!お前仕事じゃなかったのか!?!」

はるかが驚く。そう、やってきたのは彼女と同じ職場で働く弓道天馬とフリーカメラマンの反町誠であった。
「よう、はるか。知らなかったのか?俺今日は休暇だぜ」
「聞いてないぞ、そんな事」
「なんだ聞いてなかったのかよ、それはそれとして大変な事になったな」
「ああ、私にはあの人が自殺とは…」
「だろうな、しっかり者の先輩と聞いてるからな」
と天馬はそこまで言うと亜美に目を向ける。
「あれ?君は確か洗の所の…」
「初めまして、伝通院先生から貴方の事は伺っております」
「亜美、天馬を知ってるのか?」
「はい、伝通院先生とは高校時代からの親友であると聞いています、それからそこにいらっしゃる反町さんも」
「どうも皆さん、この度はご愁傷様です」
と反町が悔やみの言葉を述べる。
「いえ、とんでもないです」
「洗から全てを聞きました、アイツも苦しんでいたんですよ。それに盗聴されていたのは洗だけではなく、院長も盗聴されていたそうです」
「え!?亜美ちゃんの所の院長が!?!」
うさぎは驚く。
「ええ、それで彼も元斗会と正面切って戦う事にしたそうです」
と反町が話しているところにさらにもう一人…
「どうも皆様、この度はご愁傷様です」
「!貴方はスクラッチエージェンシーの」
そう、新たに来たのはスクラッチエージェンシーの真咲美樹であった。
「その節は本当にありがとうございました」
と亜美は美樹に礼を言う。
「いえ、私共の力量不足で警察に引き渡せなかった事を幾重にもお詫び申し上げます」
「そんな、やめて下さい!あなた方のおかげで元斗会からの監視の目を一つ取り除く事ができたのですから」
「そう言っただけなら私共も気が楽になりますわ」
「水野さん、この方が洗に仕掛けられた盗聴器を見つけた人ですか?」
と反町は尋ねる。
「そうです、この方です」
「私、スクラッチエージェンシーの社長秘書を務めております真咲美樹と申します」
と美樹は名刺を出して反町に渡しながらかき交す。
「あ、これはどうも私は反町誠と申します」
と反町も名刺を出して美樹に渡す。
「これはご丁寧に、よろしくお願い致します。フリーのカメラマンをやってらっしゃるのですか」
「ええ、洗に仕掛けられた盗聴器を見つけて下さってありがとうございます」
「いえ、お礼ならばわが社の社員に漢堂ジャンという者がおりますので彼に言ってやって下さい。彼が院長室に仕掛けられた盗聴器を見つけた事から貴方のご親友にも仕掛けられていた事が分かったのですから」
「そうだったんですか」
と反町は破顔した。
「ところで何か話してらっしゃったようですが…?」
と美樹が尋ねると
「ええ、そうなんです。洗とここにいる水野さん、それにシン院長が元斗会と正面切って戦う事にしたという話です」
「おい反町、塔和大の事件はどうするんだよ。あれもマスターから頼まれんたんじゃねえのか!?!」
と天馬が口を挟む。
「勿論だよ天馬、でもあれは五車星出版社が追っているし、俺達に出来る事は彼らのサポートぐらいなもんさ」
「えっ、二人とも五車星出版社の人とお知り合いですか?」
と亜美が尋ねる。
「そうですよ水野さん。霞拳志郎という男をご存知ですか?あの男、塔和大の卒業生でして経済学部教授の柳沢氏が恩師なんですよ。彼は早くからCP9製薬の薬害疑惑を追ってまして塔和大の事件もそれと関わりがあると睨んでますよ」

と反町は説明する。
「じゃあ、五車星出版社も私達の味方なんですね」
「ええ、我々もあなた方に協力を惜しみません。約束します」
と反町が言う
「我がスクラッチエージェンシーも社員の一人がある男の野望に手を貸しています。その男を通じて元斗会の闇を暴きましょう」
と美樹も言った。

反町、天馬、そして真咲美樹が帰った後に二人組の男が訪れる…
「うっ、うっ、グスツ…」
「えーい!!泣くな、デネブ!!みっともない!!」
「そんな事言たって、侑斗…」
「だ、誰なの?この二人…」
とまことが首をかしげると
「桜井さん!!」
と美奈子が言う。
「桜井さん?」
「桜井侑斗、私が雇った私立探偵よ。せつなさんの死に疑問を感じていたから調査を依頼したのよ」
「どうも皆さん、この度はご愁傷様です…デネブ!!まだ泣いてるのか、いい加減にしろ!!」
と桜井は後ろにいる『デネブ』という男を叱り付ける。彼の背丈は前にいる桜井より高いが涙もろい性格のようだ。

「侑斗、人の死は悲しいものだよ…グスツ」
「…ったく勝手に泣いてろ!!俺達は仕事で来たんだからな!」
「あ、あの～桜井さん。それよりも例の調査はどうなってますか?」
と美奈子が尋ねると
「ああ、すみません。せつなさんの事です。聞き込みをしたところ、やはり怪しげな男がつけていたようなのです。彼女がよく行く喫茶店の店員が彼女が出て行った後を追うように一人の男が出て行ったと言っていました」
桜井は今までの調査結果を美奈子に報告する。
「せつなさんが言っていた事は本当だったんだ…」
「その人物が何者でシャギア議員と何の関係があるかはまだ調査中ですので…」
「分かりました、引き続き調査をお願いいたします。追加料金があればお支払いいたしますので」
と美奈子が言う
「ありがとうございます、では我々は失礼します…デネブ!!泣いてないで行くぞ!!」
と桜井はまだ泣いていたデネブを叱り付けて美奈子達から去っていった。
「ねえ、大丈夫なの?あの探偵さん、助手の人が頼りなさそうだけど…」
とレイが美奈子に尋ねると
「う～ん、大丈夫…かなあ…」
と美奈子も苦笑いしながら言った、しかし次の訪問客が来た時、一同全員目をパチクリさせる事が起こったのだった…。

3

「…え!?せ、せつな…さ…ん?」
一同は驚いて自分達の目を疑った。
最後の訪問客は一組の男女であるが女性は黒いヴェールで顔を覆っているものの顔が死んだ冥王せつなにそっくりである。一方、男性のほうはというと髪を横分けで固めて眼鏡をかけており、いかにも公務員かサラリーマンっぽい顔である。
「どうも皆様、この度はご愁傷様です。あ、私はこういう者です」
と男は名刺を出して、一同に配った。
「三洋銀行…千葉支店第一営業部…城…一郎?」
「はい、実は私とこの女性はせつなさんとは昵懇の仲でしてね、彼女が自殺したと聞いたものですからいてもたってもいられずにこちらに参列させていただいたわけです」
と城一郎(作者註:苗字が城)という男が言う。
「そ…そうなんですか…し、しかしこちらの方は…」

「こちらの方は大学時代の親友で私の同僚の者です。何でも顔が瓜二つだという事で仲良くなったそうなので」
「……」

一同は城の説明が耳に入らないような表情で困惑していた。それほど目の前の女性がせつなそっくりだったのである。

「あ、あの…亡くなられた方はどんな方でしたか？」

と女性が尋ねる。

「しっかりした方でした、私達後輩にはとてもやさしくてよく面倒を見てくれたりしてくれました」

とはるかが悲しげな表情で答える。

「そう…ですか、惜しい人を亡くされましたね」

「はい…」

「では私達は焼香させていただいてから失礼いたします。皆さん、肩を落とされませんように」

と女性が言う

「お心使いありがとうございます」

とみちるが答える、そして例の二人が焼香に向かっていく時、彼女は女性が一瞬微笑んだのを見てハッと気付いた。

(間違いない!あの人はせつなさん…!!生きていたのね)

がみちるはこの事を口には出すまいと固く誓ったのであった…。

さて、焼香を終えて葬儀会場を出た二人は…

「皮肉なものね…自分の葬儀に出る事になるなんて…」

「フツ、いいじゃねえか。『冥王せつな』という女性は死んだ、そういう事だ」

そう、みちるが感づいた通り黒いヴェールを被った女性は死んだ筈の冥王せつなであった。そしてもう一人の男は何を隠そう『公権力濫用査察監視機構』の財前丈太郎である。

「さて、アンタには伊達をつけさせる。あの元斗会とリブゲートのつながりを知る唯一の生き証人だからな。本当に死んでもらっては困る」

「ええ、私はあの時本当に死ぬ筈だったもの…あの男に感づかれたから…」

「まあな、あの時は偶然だった。奴、いや奴等の動きを追っている時にたまたまアンタが殺されようとしていたところに出くわしたのだからな」

丈太郎の言葉にせつなは無言で頷いた。

「さて早めにここを退散しますか…奴等にアンタの生存が感づかれないうちに」

丈太郎はそう言うときとせつなと共に駐車場に行き、車に乗ると葬儀会場を後にして行方知れずとなった…。

さてその夜…

「いやあ、助かりましたよゼルマンさん。さすが久世副社長が頼りにしている事だけある」

「ありがとうございます、シャギア先生。私には優秀な部下がおりまして今回の手柄は彼等にあります」

ここはあの『怪談亭』の一角。この部屋にあのフロスト兄弟とゼルマンが食事をしていて、無論彼等の密談の事も女将の壺原侑子だけが知っているのみである。

「あの『闇のヤイバ』ですね」

「ええ、今回はニューマークも手下を使って女の足取りを逐一追わせましたし、後はヤイバ君が簡単に始末してくれました」

「ゼルマンさん、あの男に随分信頼を置いてますね」

「ええ、あの男は結構使えます。何せ『ダークシャドウ』の月光のもとで修行を積み、暗殺でさえ行える優秀な手駒ですよ」

「ほう、素晴らしい人材がおりますな、うらやましい限りだ」

「恐れ入ります」

「ところで兄さん、例のデータは始末したのかい？」

とオルバが尋ねると

「ああ、あの女がまさかあれを見てたとはな。出せば一火スキャンダルとなり俺はおろか関東連合自体に激震が走りかねなかった」

とシャギアは答える。彼に言うデータの中には今まで得た裏金だけでなく一部の与野党議員がマフィアと絡み、シルキーキャンディの売り上げで得た利益からの賄賂、さらにはインサイダー取引による彼等の不当な利益の資産が書かれていたのである。これはまさに 1989 年に発覚したあのリクルート疑惑に匹敵する爆弾的データだったのだ。

「あれは俺だけではない、オルバお前はおろかさウザー氏やバロン副議長、果てはティターンズ党までもが関わっていたのだ。俺とした事が迂闊だったよ。あれを編纂しパソコン上に記録を残したままトイレに行ってたのだからな。その間に見られたとは…顔色で分かったよ」

「早めに始末しておいて正解だったね、兄さん」

「そうですよ先生、弟さんの仰るとおりです。あの女にはヤイバ君が毒入りのワインを送りつけておきましたからね、我々の情報網で懸賞の応募をしていたそうですからそれを利用しました。後はあれを飲んだ女が悶えて窓から…」

「成程、しかしそれから後はどのように？」

とオルバがゼルマンに尋ねると

「そこからは俺が話そう、遺体はサザンクロスに送って死因をでっち上げてやったよ、ジャコウ会長に頼んでね。尤も院長のシンには別の用事をつくって立会わせなかったが」

とシャギアが答える。

「さて、今夜は大いに飲むか。そうそう、今度 CP9 が新薬を完成させたそうだからまた儲けがこっちにも転がり込んでくる」

「ああ、『ゴードム』ですね先生。我々の方も『あれ』のルートをまた一つ作りましたからその時の利益は勿論…」

「僕等にも来るといわけか」

「そういう事です。すでに振り込んでおきましたから」

「フッ、これほどまい商売はない」

「全くですなあ」

三人は哄笑した…。

時間は午前に遡り、壬生国行きの新幹線の中…

「ケン…」

「…」

拳志郎、バット、リンは列車の中で帝都新聞を読み、ある見出しに目を釘付けにしていた。あの冥王せつなの飛び降り自殺事件の事である。

「どう思う？」

「ど、どう思うと言っても…」

「バット、想像力を働かせろ。この女性、もしかすると…」

「殺されたとでもいうの？」

とリンは軽い驚きを示す。

「分からないがその可能性はあると見ていいだろう。この件はジュウザに任せるしかないが」

「ああ、ジュウザならすぐにも調査を始めているだろう。何でも…」

「バット！」

拳志郎は小声でバットをたしなめる。

「わ、悪い…目が光ってるもんなあ、アイツらの」

バットも小声で謝る。

「とにかく俺達の動きを連中は察している筈だ、ここからは気を抜くな」

拳志郎のこの一言にバットとリンは頷く。

「それにしても CP9 め!またとんでもない薬作りやがって!インフルエンザだけでなく肺炎にも効くとか言いやがって効き目なんか無いんだろ」

「いや、むしろこの薬の副作用が気がかりだ…。『エニエス』以上の恐ろしいものでなければいいが…」

「さて、今日からここが貴方の住居だ」

一方、葬儀会場を後にしたせつなは GIN 査察官である伊達竜英と陣内隆一と共に横浜にあるとあるマンションの一室に来ていた。彼女はしばらくここに身を潜める事になったのだった。

「…どうした？」

「いえ、ただここから外を見てみると…あの時の事を思い出すものだから…」

「ああ、あの夜か…無理もないな。貴方は死にかかった、そこへ財前さんが駆けつけてきて貴方の中の毒は吐き出されたんだからな。丁度元斗会の奴等の身辺を探っていた時だった」

「そうですね、だから私はこうして生きている…当分お酒は飲めないわね」

「まあ、気づけたほうがええで。あんさんには財前はんから聞いた筈やけどこの伊達がつくさかい、護衛の方

は任せてもらいまひよ。尤も二人は表向きには夫婦となりますがな」

「おい、よせよ陣内。彼女が困るじゃねえか」

と伊達は少し顔を赤らめる。

「何言ってまんがな、あくまで表向きや。高野 CEO からの指示だって分かっとるやろが」

「フッフ、そうすると私は『伊達せつな』と名乗ればいいかしら？」

とせつなが笑いながら言うと

「いや、貴方は名前も変えたほうがいい。そうだな、『刈奈』と名乗ったらどうだ？後で高野 CEO から許可はもらうが」

「『刈奈』…いいわね、それ。よろしくお願いしますわ、貴方」

とせつなが伊達に向かって微笑みながら言うと

「だ、だからよしてくれ。コイツも言っただろ、『表向き』なんだからさ」

と伊達は更に顔を赤くして言った。その顔を見て陣内は

「やれやれ、ほんまにちゃんと警護できるかいな。先が思いやられるで…」

と呆れ気味に言った。

同じ頃、福岡の病院の一室…

「貴方…」

「魔美、大変な事になった」

あの『エニエス』による薬害の被害者の一人、高畑和夫は妻の魔美と共に福岡の地方新聞の一面に目を釘付けにしていた。CP9 の新薬『ゴードム』が市場に出回るとい記事が載っていたからである。

「またこれで薬害患者が増える…」

「何て事なの！薬害を認めないばかりかこんな新薬まで…貴方をこんな風にしておきながらこの会社は…」

「利益一辺倒だな、くそっ！今の状態が恨めしい…」

「貴方、そんな事言わないで！拳志郎さんがきつと薬害疑惑を晴らしてくれる、それを信じましょ。私も被害者の会の人達と共にあの会社に認めさせようと動いているから」

「…そうだったな、ごめん」

「それに検察庁も薬害疑惑について調べてくれている、特に久利生公平という検事は私達に協力してくれるわ。だから貴方は肝炎を完治させる事だけを考えて」

「ああ、分かったよ」

和夫は妻に笑顔に向けた…。

4

「…呆れたわねえ。アンタ、後先考えずに会社辞めるなんてアホもいいところよ」

「んなこと言たってよ～、あんにやろ、おっさんを一方的にクビにしやがって」

ここはゼーラ帝国内、とある海岸近くにあるレストラン『バラティエ・ハポン』、色々なレストランガイドから三ツ星をもらうスペインのマラガに本店を持つレストラン『バラティエ』が日本に出店した第一号店である。

この店に一人の男性客が店の店員でもある女性と話していた。女の名はナミ、客の名はモンキー・D・ルフィ、ナミはこのレストランのオーナーシェフであるサンジの妻にして会計係、ルフィは CP9 で MR(医薬情報担当者)『だった』男である。何故『だった』なのかということここに来る数時間前、会社を辞めて飛び出してきたからである。

数時間前…

「何い——っ!!?ガジャのおっさんがクビになったあ——っ!!?」

ルフィは昼休みにたまたま出会ったコビー・ヘルメツポ・ウソップの三人からガジャがクビになったという事を聞き、驚きのあまり大声をあげた。それもその筈、彼は半月ほど前から凄まじい過密スケジュールで日本各地の病院に派遣され、昨日になってへとへとの状態で戻ってきたばかりであったからだ。

「シーツ!!静かにしろ!上層部の連中に聞こえたらどうすんだよ」

「この馬鹿!クビになりたいのかよ!？」

「そうですよ、落ち着いて下さいルフィさん」

三人は小声で彼を嗜める。が彼は既に顔が怒りの形相になっていた、彼は直情径行な性格なのである。

「あんの野郎——っ!!!おっさんからデータを奪ったばかりか用済みとばかりにポイ捨てしやがって——っ!!俺達は使い捨てのモノじゃねえんだぞ!!もう勘弁ならね——っ!!!」

元タルフィは薬の知識に関しては乏しく、本能のままに薬を売ってることが多かった。その為しばしば研究所へ赴き、ガジャや他の研究員に薬についての薬効や副作用について尋ねて知識を得ていた。それ故ガジャから

はそのひたむきな努力が認められ彼に気に入られ、会社のことについてなどを話し合う仲にまでなっていた。その恩義があるが故にルフィの怒りは凄まじかった。

「お、おいルフィ!よせ、やめとけって!!」

「そうですよ!貴方一人で何ができるんですか!!」

「例え文句言ってもよ、クビにされるのがオチだぞ!!分かってんのかよ!?!」

三人は体を張って彼を止めようとする、が

「離せ——っ!!離せって言ってんだろうが——っ!!!」

とルフィは三人を振り切って走り去って行った。

「…ルフィ」

「ありゃあ、クビ確定だな…」

後に残った三人は呆然と彼を見送った。

「スパンダーームッ!!どこだ——っ!!?出て来——っ!!!」

ルフィは大声で叫びながら会社中を走り回る、そこへ

「うるさいぞ!!社内で静かにできんのか!!?!」

と怒鳴り返した男がいる、あの『鬼課長』と恐れられている第一営業部課長のモーガンだ。

「お前こそうるせ——っ!!スパンダムはどこだ!!?!」

「何っ!貴様、社長を呼び捨てにするとはい!!こっちへ来い!!性根を叩きなおしてやる!!」

とモーガンはルフィの襟を掴んで引っ張って行こうとする。が次の瞬間

「ウグッ!!」

彼は鳩尾を打たれてその場に蹲った。

「お前なんかには用はねえ!!俺はスパンダムに用があるんだ、邪魔すんな!!」

ルフィはそう言い捨てるとまた走り去って行った。

「す、すげえ…」

「あの鬼課長を…」

その場を見ていた社員達はびっくりしていた。

「あっ、スパンダム!!」

ルフィは遂に社長室に入ろうとしていたスパンダムを見つけた。彼は閉まろうとしていたドアのノブを掴み、開いた状態のままにして社長室に乗り込む。

「おい何だ何だ!?!いきなり入ってきやがって、何か用か!?!」

突然入ってきたルフィにスパンダムは驚いて尋ねる。

「やいスパンダム!お前って奴は何を考えているんだ!!」

ルフィは相手に怒鳴りながら詰め寄る。

「何のことだ?この前の出勤については残業代は筈んでやったがな」

「そんな事じゃねえ!なぜガジャのおっさんをクビにした!!」

「あいつはゴードムを会社部外に持ち出してつばさ製薬に売り抜けようとしたのでクビにした。正当ではないか」

「嘘付け!!あのおっさんがそんな事をする筈がないだろう!!むしろ金儲けしたいのはお前のほうだろうが!!」

「うるせえ!!テメエこそ、この行為自体が越権行為だろうが!」

「何を!お前の為にどんだけの人が苦しみ、死んでいるのか分かってんのか!?!」

「あれは微々たる数字にしかすぎないさ」

「1000人が微々たる数字だって!?!一人殺して殺人犯、千人殺して英雄なのか!!」

「ダーツハッハッハ!!チャップリンは俺の会社にはいらない!金稼ぎに正義も悪もへったくれもねえんだよ!!大体テメエだって俺の下で働いて給料もらってるだろうが!!金や女ならすぐにあてがってやるがな。だが文句言える立場じゃねえんだよ、分かったか!!」

この一言にルフィは怒髪天を衝き

「ああそうかよ、よく分かったぜ。お前が金の為なら死人が出ようが何だろうが関係ねえってことがよ!!だったらこんな会社辞めてやる!!お前みたいな奴の下で働けるかバカヤロー——っ!!」

と叫び、怒りで震えた拳をスパンダムの右ほおに向けて力いっぱい殴りつけて社長室を出て行った。

「痛テテテ…あの野郎!!だったらこっちも望みどおりにしてやる!!テメエみてえな奴が何人辞めたってなあ!企業ってもんは潰れねえんだよ!!ダーツハッハッハ!!…アテテテ」

殴られたスパンダムはルフィがいなくなった社長室で一人叫ぶ、そこへ

「失礼します。社長、どうかなさったのですか?先ほどの部屋から大声が上がってましたが」
と言いながら常務のロブ・ルッチが入ってきた。
「おおルッチか、馬鹿な社員が俺に楯突きやがったばかりかこの俺をぶん殴って辞めてったんだよ、痛テテテ…。全く笑っちゃうぜ」
「フツ、愚かな奴がいたもんですな。ところでゴードムの売り上げですが予想よりも更に上回ったという報告がきております」
「おお、そうか。なら今夜もパァーッとやるか」
「それと…」
「ん、何だ?」
「実は先ほどノルウェーのオスロ大学から電話がありまして、近々我が社の研究所を見学したいと言われました」
「何!?もしかしてあのウィルス研究の第一人者であるあの教授が!?!」
「はい、来日されるとのことですよ」
「ダーツハツハツハ!!そりゃあいい!!こちらこそ是非お待ちしておりますと伝えておけ」
「はい、私の一存でそのように答えておきましたがよろしいでしょうか?」
「さすがルッチだ、手回しがいいな。よし、うるさい奴も辞めていったことだし順風満帆だな」
この時のルフィに対するスパンダムの考えはこの程度のものであった。しかし CP9 製薬はこの時が頂点だったというべきであろう。彼にとってこの先が転落への道を突き進む事になることもこの後のルフィの行動が彼を大いに悩ませることすらも知る由もなかった…。

時系列を『バラティエ・ハボン』に戻す…
「んナミすわ〜ん!たっだいま〜!」
この店のオーナーシェフであるサンジが帰って来た。彼は今まで買出しに出かけていたのだった。
「あ、サンジ君お帰り」
「よう、サンジ」
「あ?ルフィじゃねえか、何でここにいるんだ?今日は店が休みだって知ってんだろうが」
サンジはルフィが来ていることに少し驚いて彼に尋ねる。
「サンジ君聞いてよ、実はルフィったらね…」
とナミが代わってルフィの経緯をサンジに説明すると
「何だと!?クソ単純な野郎だなオメエは…」
と彼も呆れ顔になって言う。尚、彼は時々話の中に『クソ〜』とつけるのが口癖だ。
「だからさ〜、これからどうしようかと思い悩んでんだよ〜」
「言っとくがここに雇ってもらおうと思ってんならクソお断りだ。ただでさえオメエはクソ大食いだしな」
「そうよ、おまけに不器用だし。この店減茶苦茶にされたらお手上げよ、その為に金がいくらあっても足りないわよ」
「そんなあ〜」
さすがにルフィは困り果てたがふと何かを思い出したような顔になり
「なあサンジ、そーいやあお前、以前あの連中のことについて話してたよな」
と言う。
「ああ、あのクソ NGO 団体のことか。確かに奴らとはクソ入魂の仲だが…」
「そいつらを紹介してくれねえか?俺、どうしてもスパンダムの野郎に一泡吹かせてやりてえんだよ」
「まあ、そういうことならクソできなくもねえが…」
「本当か!?ありがとな〜」
とルフィは顔に喜色を取り戻し、サンジに礼を言う。
「ところでサンジ君、買出しの方はどうだったのよ?まさか相当金かけたんじゃないでしょうね」
とナミが揶揄するような目つきでサンジに尋ねる。彼女はお金に関してはシビアなのだ。
「それがナミさん、あのクソ会社から出る排水のせいでここんところ魚もいいのがクソ揚がらねえんだよ。漁師達も『これじゃあ売り物にもなりやしねえ』ってクソぼやいていたよ」
「そう、ゼーラで魚の購入は難しくなるわね。で、他の方はどうだったのよ?」
「安心してくれナミさん、肉と野菜はクソ手頃なやつが手に入ったよ。これで当面は乗り切ろう」
「何い!?肉う〜!?おいサンジ、腹減ったから何か作ってくれ」
ルフィは目を輝かせてサンジに頼む、彼は肉料理が好物なのだ。が
「テメエーっ!!クソ真面目に紹介してもらおう気あんのかーっ!!?それに今日は休みだってクソ言ってるんだろ

が——っ!!!」
と怒鳴られる。
「ひど〜い…」

ルフィは恨めしげな顔で返した。

「全く、どうなっているんだ!」

「先輩、落ち着いて!」

青年をなだめる女性。千秋真一といい、なだめているのは野田恵(通称のため、アンソニーの弟子)である。紅茶を飲んでいた広志、美紅、アンソニー、その妻のリンダが驚いている。

「何があった。ゆっくり話を聞こう」

「実は以前のスポンサーから新たなオーケストラに団員を引き抜かれる寸前でした」

「引き抜きか。こりゃいけないね」

「リブゲートの子会社の不動産会社の部長というユダがやってきて『川崎シチズンオーケストラを解散して欲しい、金はこれだけ出す』と言って2億円を出してきました」

「金で解散を強要するのか。酷い話だね」

「ケツの穴の小ささか男たいね!」

広志が呆れ果てる。のだめは出身地の大川弁が飛び出した。感情的になるとよくとび出す癖がある。

「断ったら一人ずつストーカーしてでも引き抜いてやると言い放って帰っていききましたよ」

「ハハハ、それは無理な話だよ。千秋君、俺のスポンサーが誰か知って彼らはけんかを売っているのかね」

「そうですね。かりかりしては彼女につらい思いをさせますよ」

「すみません、エバンス卿」

広志のスポンサーは英国連合王朝の一つであるケルト・ディン家の女王・クリスティーナ1世だ。しかも石油の権利権限の一部の譲渡を受けていたために世界屈指の企業であるザイナーズからブラックプラチナカードの発行も受けていた。普段は使わないのだが、いざというときには容赦なく切る。

広志の住んでいる部屋は元々は中学校の廃校地だった。それを建物ごと買い取って改装し、GINの研究機能も備えた施設にしたのだった。更にはリブゲートの悪事に苦しんだアプリコットコンピュータ支援に台湾大手のパソコンメーカーの経営権とリブゲートの債権を買収して譲渡し支援を行ったりした。その結果、アプリコットコンピュータは世界屈指のコンピュータ会社に生まれ変わった。その分悪党どもからは容赦なく資産を奪い取る厳しさも秘めている。

「川崎シチズンオーケストラの支援の話はどうになりましたか」

「決まったよ。つばさ製薬工業に加えてアプリコットコンピュータも参加することになったよ」

「本当ですか」

「元々本業はしっかりしていた。ただ法律の無知につけ込まれて債務を負わされたんだ。弁護士さえ付いたら強い。桜庭先輩の所属事務所が担当しているからね」

桜庭とは桜庭薫といい、広志の先輩で弁護士になった。

「それなら納得です。ところでCEO、聞きたい事があるんです」

「何の事なんだ」

「うちのオーケストラの一人がこの前シャギア・フロスト関東議会議員の秘書が『飛び降り自殺』した事件で真相を探しているんです。CEOは何か把握しているんですか」

「おいおい、俺は捜査にノータッチだからね。もし関わっていたら機密に関わるので話せないんだ」

「GINが捜査しているっていう噂があるんですけど」

「そんな、それは噂止まりの話だよ」

「なあんだ、つまんないのお」

のだめは膨れっ面になる。その時、千秋の携帯が鳴る。

「もしもし…何だって!?冗談じゃない!!分かった、今すぐ行くから俺達が来るまで話を引き伸ばせ!!」

「先輩、何かあったんですか?」

とのだめが訊くと

「あのユダって男が今度は川崎にある市民会館を買収して明日から取り壊すって言うんだ。お前も知ってるだろう、あそこで一週間後にコンサートやるのを。それを潰して嫌がらせするつもりらしい」

「ええっ!?そんなあ〜」

「今度は妨害工作か、相当しつこいな」

と広志がしかめっ面になる。

「CEO、そういう訳で俺達は失礼します。のだめ、急げ!!」

「せ、先ばあ〜い、待って下さ〜い!」

千秋とのだめは慌しく広志の住むマンションを後にした。

「だから一週間ぐらい待ってくれてもいいじゃないか!!それからでも…」

「ダメなものはダメだ。これは既に決定事項だ」

シチズンオーケストラのメンバー達が化粧をした女性らしき人物と揉めている。この女性らしき人物こそあの『恐竜や』の主、杉下龍之介から土地を詐欺同然と買い叩いた男ユダである。

「あっ、おーい千秋!こっちだ、こっち!」

ティンパニー担当の奥山真澄が自分達の所へ走ってくる千秋とのだめを見つけて二人に声をかける。ユダも二人に気がつく。

「おやおや、千秋君ではないか」

「おい、ユダ!今度は会場の乗っ取りか!?そこまでして俺達を解散させたいのかよ!!」

「乗っ取りとは人聞きの悪い、この市民会館が老朽化しているから我々リブゲートフィナンシャルで建替えようとしているだけだ。それに解散の話は決裂で済んだのだろう?だったらこれは前の話とは関係ないではないか」

「何!?」

「とにかく、解体は明日からだ。一週間後にコンサートがあろうがなかろうが私にはどうでもいいことだ。まあ、コンサートをやりたいければ別の所でも探すことだな」

「アンタ、ケツの小さが男たいね!!前の話と関係ないならそこまで急ぐことなかない!!まいつとき待てんか!?!」

のだめも大川弁でユダに抗議するが

「やれやれ、これだから田舎者は困るねえ。既に市側との契約は交わしてあるんだ、諦めたまえ。それとも君達がここを買い取るのかね?まさか建造物侵入罪を覚悟でコンサートを強行するわけでもあるまいし。では私は失礼するよ、忙しいのでね」

と皮肉を言うと勝ち誇ったようにニヤッと笑いながら去っていった。

「先ばあ〜い、どうするんですかあ〜?」

とのだめが怒りで体を震わせている千秋に言うと

「もういい!!帰るぞ!!」

と彼はその場からスタスタと立ち去っていった。

同じ頃…

「何だと!?冗談じゃねえ!!」

と千秋と同じ台詞を言った人物が東京の大田区にいた…。

「俺達はこんなことの為に機械を作ってんじゃねえんだぞ!俺達の製品を何だと思ってるんだ!!」

ここは『サージェス精密工業』という小さな工場である。ここでは主に通信機器(主に携帯)に使われる精密機械を作っている。この工場の従業員である伊能真墨はいきりたっていた。無理も無い、受注先の会社がマードック社に買収され、真墨達の工場で作られている基板に目をつけて高性能盗聴器を開発していると聞いたからだ。

「まったくだ!!俺様達の製品はなあ!!そんな物の部品とする為に作ってんじゃねえんだぞ!!ふざけやがって!!」

真墨と同じ従業員である高岳映士も彼に同調して憤慨する。

「まあまあまあ、真墨も映ちゃんもカッカしないの」

と間宮菜月が二人を宥めるが

「何言ってるんだ!!これがカッカせずにはいられるかよ!!」

と二人の怒りは収まらない。

「菜月に怒らなくたっていいじゃな〜い…」

と彼女の顔が涙目になる。

「そうだよ、菜月ちゃんに怒鳴ってもしょうがないだろう」

と奥から最上蒼太が西峰さくらと共に現れながら二人に言う。

「蒼太、お前は怒れねえのかよ。俺達の基板がとんでもないことに使われようとしてるんだぜ」

「そんなこと言ったってしょうがないじゃん、他に受注先がないんだから」

「そりゃあ、そうだが…さくら姉さん、姉さんの実家とかのコネでもいいからさ、受注先を代えられねえのかよ」

と真墨はさくらに言う、しかし

「残念ですが蒼太さんの言うとおり、他の受注先が見つかりません。というよりどこもマードック社が買収して傘下に収めてしまってます。それに私は実家に頼るつもりはありません」

とピシヤリと言われた。元々さくらは西峰財閥の令嬢だったのだが自分のやりたい事を探す為に警察軍大学に入学、通信・工学部門から特殊部隊を経て射撃のオリンピック候補にまでなった。そこを当時立ち上げたばか

りの『サージェス精密工業』工場長である明石暁にスカウトされ、予備役入りを条件にこの工場に就職したのであった。

「マジかよ…それじゃ完全にお手上げじゃねえか」

と映士がぼやいた時、

ドンガラガラガッシャーン!!

と奥から物凄い物音がした。

「な、何だ!？」

と五人が驚いて物音のした部屋へ向かう。そこには物が散乱し、一人の女性がその物の中に埋もれるような形で倒れていた。

「どうしました!?大丈夫ですか?」

「痛タタタ…ま～たやってしまったておじゃるよ…」

彼女の名は及川玲奈、この工場で開発研究員をやっている。彼女は科学アカデミアにいたのだが彼女もまた明石にスカウトされてこの工場に日夜研究開発に明け暮れている。因みに彼女は京都出身である為に貴族言葉が染み付いている。

「また、お前かよ…ホントに『ケガレシア』だな…」

と映士が呆れながら彼女に言葉をかける。彼女はドジなところがあり、その為に転んで痣をつくったり、指先に生傷をつくったりするので『ケガレシア』というあだ名がある。

「うるさいでおじゃる!そもそもこの研究室が散らかっているのが悪いのでおじゃるよ!」

とケガレシアが口を尖らせて映士に言い返しながら立ち上がる。そこへ

「おおケガレシアよ、大丈夫か?だからそのサンプルは私が取ると言ったぞよ」

と同じ研究員である北村光輝(通称:キタネイダス)が彼女に駆け寄る。彼のあだ名の由来は研究熱心で時には風呂に何日間も入らないほど集中する時があることからそう呼ばれる。

「平気でおじゃるよ、キタネイダス。それにしてもヨゴシュタインはホントに散らかしっぱなしでおじゃるなあ」

ケガレシアは部屋を見渡しながら言う。彼女がサンプルに埋もれたのは棚に置いてあったサンプルの一つを取ろうとして床に転がっていたペットボトルで足を滑らせたからである。

「確かに玲奈さんの言うとおりですね、どこもかしこも…」

「ったくアイツは片付けられねえのかよ」

「いやなに、私も彼によく言い聞かせているのだから変わってないぞよ」

「何か言ったなりか?」

と後ろから声がした。全員が振り向くと研究室長の牧野森男と共に『ヨゴシュタイン』ことバロン・ド・シュタインが立っていた。バロンが『ヨゴシュタイン』と呼ばれるのは研究室を散らかしてばかりいる上に掃除もしないからである。

「ああ、お前が散らかしてるせいでケガレシアがサンプル埋もれちゃったと言ったんだよ」

と真墨が口を尖らせて言うと

「え!?ついさっきも片付けたなりが…」

とヨゴシュタインが返す。

「これのどこが片付けている状況ぞよ!?思いっきり散らかってるぞよ」

「キタネイダスの言うとおりだぜ!お前、いい加減にやってるだろ!？」

「いや、そんなことはないなりが…」

「じゃ、これは一体どういうことでおじゃるか!？」

「ケ、ケガレシアまでそんなこと言うなりか…」

「当たり前です!これではケガレシアさんが怪我しても足りませんよ!」

「い、いや…その…」

剛腹な性格のヨゴシュタインも皆から非難されて縮こまるが

「まあまあ、そのぐらいにしてあげて下さいよ。彼とて彼なりに整理整頓してるんですから」

と牧野が宥める。更にそこへ

「どうした?よくもまあ散らかっているな」

と明石が呆れ気味に言いながら現れる。

「チーフ!!」

「明石か、この野郎に何とか言ってくれ!これじゃ開発どころじゃねえよ!」

「まあいいじゃないか、今から全員で掃除すれば話は早いんじゃないか?」

「明石!」

真墨は明石に詰め寄る。明石は皆から『チーフ』と呼ばれるが真墨だけはプライドが高いせいか彼を呼び捨て

にする。

「とにかくだ、これでは製品の開発研究もままならんことは確かだ。全員掃除に取り掛かれ!アタック!!」
明石は真墨の詰め寄りを受け流すかのように指をパチンと鳴らして従業員達に指示を出した。

5

壬生国の選挙が一週間後に迫った日…

成田・セントレア(中部国際空港)・関空などの日本連合共和国内にある国際空港からバラバラに入国してきた数人の男女がいた。一見私服姿で観光目的のようであるが、どうもお互い連絡を取り合っている。

「そうか…分かった、俺はアイツと接触する」

成田に降り立った男の一人が携帯で誰かと話している。話し終わるとこう呟く。

「任務…了解」

彼らこそ国連が秘密裏に組織し世界中のあらゆる世情を調査、時には介入もする秘密諜報機関『ソレスタルビーイング』である。

メンバーの一人、ヒイロ・ユイは上野公園で人を待っている。ここに来てから一時間して彼と同年の男が来る。二人は無言で目配せし、男が通り過ぎて数秒間を置いてヒイロは立ち上がり男についていく…。

数時間後、二人はあのホテル『リック』内にある喫茶店『恐竜や』にいた。彼らは一番奥のテーブルで向かい合わせに座っていた。

「そうか…喪黒という男か、この国の警察及び諜報機関が目をつけているのは」

ヒイロが訊き返している。

「ああ、奴とその一族の素性がまるで読めないらしい、それと秘書のパプテマス・シロッコという男が独自に行動を起こしている」

男が答える。

「壬生国以外の反応は？」

「ここ関東連合で涼宮ハルヒという女が政治工作をしている。むしろここを守ろうという動きだな、オーブを相当警戒している」

「その女に接触はできるか？」

「今、俺がその女の下で働いている、喪黒の素性が分かるかもしれない」

「そうか、いずれにせよ壬生国の政治制度に世界が注目している。俺達の任務はその制度がどういう方向へ向かうか見定めることだからな、刹那」

「ああ、それと『死神』の監視及び暴走の阻止だ…」

ヒイロに名前を呼ばれた男…刹那・F・セイエイ(コードネーム:エクシア)は頷きながら言う。尚、この刹那という男は日本人ではなく中央アジアの小国アゼルバイジャンの出身である。ついでに言えば、ヒイロのコードネームは『ウイングゼロ』だ。

その二人をカウンターから見ていた二人の男達がいた…。

「叔父さん、彼等は随分と話し込んでますねえ。どう見ても只の少年二人とは思えませんが」

「お前もそう思うか、右京」

そう、ヒイロと刹那を見ていたのは『恐竜や』の店長、杉下龍之介と彼の甥であり『ゴリラ』の潜入捜査官である右京だった。右京はたまたまこの日、潜入している会社が休みだったので『恐竜や』の様子見も兼ねて叔父の龍之介のところに来たのだった。

「一体あいつ等は何者なんじゃ?顔つきからして何かをやろうとしているように見えるが…」

「確かに、真面目というような顔だけではないようですねえ。もしかすると…」

「もしかすると、何だ？」

「案外重要な仕事をしているのかもしれないよ」

「何っ?まさか犯罪に…」

「いえ、心配はいりません。彼等の顔からは犯罪の匂いはしませんから」

「ならいいが…」

龍之介は胸を撫で下ろす。

「それよりも叔父さん、この店の状況はどうなのですか？」

「見てのとおり相変わらずじゃ、こんな奥だった所では客なぞ来ぬわい。来てもまばらじゃ」

「大変そうですねえ、そう言えば凌駕君の姿が見えませんが」

「凌駕だけではない、アスカ君もこの店をなんとかする為に方々駆けずり回っておるのじゃ。しかしこれといった結果が得られなくてのう…」

「困りましたねえ、できれば僕も手伝ってあげたいのですが…」

「分かっておるよ、お前も別の仕事があるんじゃないろ。詳しくは尋ねんが」

「そう言っただけだと助かります、店の事は亀山君にも頼んでみますよ。何か手が閃けばいいのですがねえ…」

「さあ、罪深き迷える子羊よ。神の許しを乞いたまえ」

ここは名古屋にある小さな教会。ここに同じく『ソレスタルビーイング』のメンバーであるデュオ・マックスウェルが牧師として働いていた。彼は今、懺悔室で人々の懺悔を聞いている。

「牧師様、私の罪を聞いていただけますか？」

懺悔室に入ってそう言ったのは紫の髪をし、眼鏡を掛けた少年だった。

「いいですとも、ではその戸に鍵を掛けて貴方の罪を神に告白しなさい」

とデュオは懺悔室の真ん中にある仕切り越しにその少年に言った。少年は戸に鍵を掛けて席に座り、口を開く。

「神よ、今私はここに死神と行動を共にしております。そしてその死神は私の目の前で牧師に化けております」

「げ、お前かよティエリア。いやみな事を言うなあ…」

デュオは顔を顰めて仕切りの向こう側にいる少年、ティエリア・アーデ(コードネーム:ヴァーチェ)に言う。

「フツ、お前こそ『死神』のくせに牧師をしているとはジョークにしてはなかなかのものだ。尤も別の『死神』を監視するわけだがな」

そう、デュオのコードネームは『デスサイズ』即ち『死神の鎌』である。

「うるせえ、あんな奴等と一緒にするな。アイツ等、性格に問題有りの連中だろ。だから俺達はあいつ等の監視もやらされてるじゃねえか」

デュオが言うとおりの、彼等『ソレスタルビーイング』が監視する『死神』には暗殺を専門とする為、問題のある人物も少なくない。国連事務次長マクシミリアン・ジーナスが懸念するのも無理はないし、それに『ソレスタルビーイング』のメンバーも『死神』に所属する人物達を嫌っている。

「まあな、私もあの連中は好かん。それはそれとして壬生国の話に入ろう。例の『公平透明党』だがかなり買収工作を進めているぞ、先日も『岩田屋フーズ』という食品会社を買収された」

「かつ、よくやるねえ。『力のみが全て』ってわけかよ」

「それを恐れてか防衛省の身辺で対立していた二つの派閥が手を組むことになった。お前も聞いているだろう、現防衛大臣の朽木白哉とカイオウ・ラオウ兄弟との確執を」

「ああ、でも防衛省の連中が手を取り合うのも分かる気がするぜ。何せ相手は悪名高いリブゲート、いや更にその後ろにいるアメリカを後ろ盾とする奴等だからねえ」

「そういうことだ、ところでお前の方は何か掴めたか？まさか、サボってデートしていたわけではあるまいな」とティエリアはデュオに揶揄しながら尋ねる。

「おいおい、お前は どうしてそんなにいやみな事ばっか言うんだよ。第一ヒルデは関東連合にいるんだぜ、手紙出ただけで仕事サボってたわけじゃねえよ。俺が何のために牧師に化けていると思ってるんだ」

デュオにはヒルデという名の恋人がいる、が彼女はデュオが何をしているのかは知らない。因みにヒルデの兄はあのカミーユ・ビダンである。

「フツ、そうだったな。で情報の方は掴めたのか？」

「ああ、壬生国にある埋立地を買い取って京都にある荒れ寺を移築したそう。名が何でも『魔の庵』というそうだが」

「それが奴等と何の関係がある？」

「そこの埋立地というのが産業廃棄物処理用に使ってた所なんだ、しかもそこの浄化事業をやったのがリブゲートと提携させられたモルゲンレーテという企業だ。あそこは携帯電話産業もやってるだろ、奴等その会社を通じて壬生国の携帯電話事業まで乗っ取る気だ」

「つまりその『魔の庵』建設は己の票集めと壬生国産業参入の為の布石というわけか」

「そういうことだ、このままいきゃあ奴等『公平透明党』の思うがままだな。ついでにこの名古屋近くにある大手自動車産業のハヤタ自動車も奴等に媚びて政治献金を贈っているそうだ」

「成程、だがそういうやり方にはいつかは反発が来る。我々の本格的な出番はその時だな、当然アイツ等も動く」

「ああ、アイツ等だけは暴走させちゃいけねえからな」

「わあ〜っ!!すご〜い!!!」

壬生国内のとある公園で三人の少年達が音楽を奏でながら子供達を相手に大道芸をしていた。

バイオリンを弾いている金髪の美少年がカトル・ラバーバ・ウィナー(コードネーム: サンドロック)、ピエロの格好をしてジャグリングをしている二人の少年で茶色い髪をしているのがトロワ・バートン(コードネーム: ヘビーアームズ)、一方の緑の髪の少年の名はアレルヤ・ハプティズム(コードネーム: キュリオス)である。無論、彼等はただここで芸を披露しているわけではない。実は彼等がいる公園の斜め向かいが例の『公平透明党』の事務所なのである、彼等はこの公園付近などで芸をしながらこの事務所の人物の行動を調べているのである。やがて彼等は芸を終わらせると子供達から拍手が送られた、彼等はお辞儀をして拍手に答える。

「ねえお兄ちゃん達、もっと何かやってよ」

と小銭を払いながら子供達がカトル達にせがむ。

「ごめんね、そろそろ夕方だしお兄ちゃん達も用事があるって行かなくっちゃならないんだ」

とカトルはやんわりと断る。

「え～っ!! そんなぁ～」

「本当にごめん。その代わり、明日もここに来るからみんなもお友達やお父さんお母さん達も連れてきてよ。その時にもっと面白い芸を見せてあげる」

とカトルが笑顔で言うと

「ホント? 約束してくれる?」

「いいよ、約束する」

「やった一つ!! きっとだよ～」

と子供達は大喜びでそれぞれ家に帰っていった。その後、カトル達三人は道具をケースや鞆に詰めると近くにあったベンチに座る。

「今のところ、目立った動きはないね」

とカトルが言うと

「そうだな、あの事務所を見る限りはな」

とアレルヤが答える。

「だが札幌での例がある。あれも裏でリブゲートが絡んでいるらしかったからな、だがあの時警察はその決定的証拠を掴むことができなかったそうだから相当巧妙にやっているかもしれん」

とトロワが言う。

「うん、そうだね。あの事件は確か覚せい剤がらみで発覚したと聞いているけど」

「その覚せい剤がらみかどうか知らないが気になる事件が関東連合で起こった。これを見ろ」

とアレルヤが鞆から一冊の雑誌を出してページをめくり、二人に見せる。

「秘書飛び降り自殺事件か…これって確か様々な噂が飛び交っているって聞いているが」

「そうだ、この雑誌にも書いてあるだろう、『事件の裏に裏金疑惑が絡んでいる可能性あり。黒幕は大手代議士と企業グループか?』とな」

「本当だ、『被害者の女性秘書は何らかのきっかけで疑惑に気づき、そのことを知った代議士がマフィアに殺人を依頼、彼女はその犠牲になった』ってあるよ」と三人が話し合っているところへ一人の金髪の女性が来る。

「探しましたわよ、三人とも」

「ドロシー!」

カトルに呼ばれた少女、ドロシー・カタロニア(コードネーム: リーブラ)もまた壬生国に潜入したメンバーの一人である。

「ターゲットの動きはどうかしら?」

「今のところは目立った動きはない。そっちは何か掴めたか?」

「マードック社をご存知かしら? 壬生国内のマスコミ企業を二社買収したそうよ。これであの男の当選は確実ね」

「やはり米国寄りになるか…」

「続きはホテルの部屋を予約してあるからそこで話しますわ」

「まさか大手の豪華な所じゃないよね? あそこじゃ目立ちすぎるよ」

「ご心配なく、ありふれたビジネスホテルよ。私だってそこはわきまえてますから」

「ならいいが…では行くか」

四人が荷物を持って公園を出る、その時だった。アレルヤは道路の向かい側を歩いている灰色のロングヘアの少女を見かけた、彼は驚いた表情をして呟く。

「!…マリー…」

「あら? どうかされましたの? あの人が」

アレルヤが驚いた表情をしているのを見たドロシーは彼に話しかけるが

「い、いや何でもない。俺の知り合いにそっくりだったから…」

アレルヤは慌てて自分の思っていることを打ち消しながら答える。

「そうですか…なら行きますわよ」

「ああ、そうだな」

しかし、アレルヤの心の中ではさっき見かけた少女の顔が焼きついてた。

(あれは間違いなくマリーだ…どうして…どうして彼女がこの国にいるんだ…何故…)

その後、彼はその少女と再び思いがけない形で再会することになる…。

場所は変わって…、ここはゼーラ帝国内にある鳥取空港…。

「ロックオン、遅いわね。ゼクス」

「仕方がないさ、今税関で引っかかっているからね」

空港内にあるベンチでフェルト・グレイス(コードネーム:ナドレ)とゼクス・マーキス(本名:ミリアルド・ピースクラフト、コードネーム:トールギス)は人を待っていた。一緒に来たロックオン・ストラトス(本名:ニール・ディランディ、コードネーム:デュナメス)が持ってきた銃のことで税関に引っかかり、取調べを受けていたのだ。因みにその持ってきた銃は今度ゼーラ帝国が開催するクレイ射撃大会用に使う物である。

「やあ、待たせたな」

ロックオンがようやく取調べから解放されて二人の許に来る。

「長かったね、説明に手間取ったの？」

「いや、会員証を鞆の中に入れてたのはいいがどの辺りに入れていたか忘れちゃってね、出すのに時間がかかってしまったんだ」

「おいおい、ちゃんと覚えやすいところに入れとけよ」

「悪い悪い…。そういえば、スメラギさんは？」

「今、免税店で買い物してる」

「まさかまた酒買ってんじゃねえだろうな、よく飲むからねえ、あの人」

と話し合っている所へ

「お待たせ」

と彼らの話の対象であったスメラギ・李・ノリエガ(コードネーム:プトレマイオス)が買い物を済ませて彼らの許に来る。

「また酒かよ、いい加減にしたらどうなんだよ。体壊すぜ」

「いいじゃない、私だって節度持って飲んでるんだから平気よ」

「だがロックオンの言う通りだ、我々の目的を忘れてもらっては困るな」

「勿論よ、忘れてなどいないわ」

「ならば行くぞ。ああそうだ、『トーラス』から連絡が来た。たった今羽田に着いて例の会社に向かうそうだ」

四人は出入り口へと向かう、その途中でスメラギはふと立ち止まり空港の窓からの景色を見ながら決意を込めた目で呟いた。

「帰ってきたわ…お父様」

「お～い、スメラギさん!何やってんだよ!？」

「ああ、ごめんなさい。今行くわ」

とロックオンの呼ぶ声で我に返った彼女は仲間の許へ駆けていく。その彼女をじっと見ている鋭い目をした男がいた。男は携帯を取り出すとどこかへ掛ける。

「社長、あの女が帰ってきました。ええ間違いありません、まぎれもなくノリエガの娘です…」

同じ頃、神戸では…

メンバーの一人、王留美(ワン・リューミン コードネーム:ヴァイエイト)はボディーガードである紅龍(ホン・ロン コードネーム:メルクリウス)を連れて『張々湖飯店』という中華料理店にいた。彼女はここで人と待ち合わせをしていた。

「遅いですわねえ…龍、他のメンバーから連絡は来てるかしら」

彼女はウーロン茶を飲みながら龍に尋ねる。

「いえ、まだ連絡は来ておりません」

「そう、それにしても予定より遅れてるわ。どうしたのかしら？」

すると

「いやあ、悪い悪い」

と一人の少年が留美の許に来た。彼の名はアディン・バーネット、コードネームは『グリープ』である。

「随分遅かったですわよ。何かありました？」

「いや、竜妹蘭(リュウ・メイラン コードネーム:ハイドラ)が関空に迎えに来ると言ってたけどすれ違っちゃってね、空港内を探してようやく会えたんだ。それで時間をくっちゃった」

「ふう、困りますわねえ。ちゃんとして下さい。ところで妹蘭さんは?」

「ああ、『五飛に会う』って言って空港で別れた」

「では貴方単身でこちらに?」

「ああ、そういうこと。さて腹減ったなあ、何か食おうっと」

「それはよろしいのですがその前に話し合うことがあるのではなくて」

「そうだった、けど食事しながらでもいいだろう?」

「それもそうですわね。龍、注文をお願い」

「はい、お嬢様」

龍は店員を探す。すると一人のウェイターを見つけたので彼は呼び止めた、がそのウェイターの顔を見た途端、彼は驚き、留美とアディンの許に連れてきた。

「五飛!!お前、ここで働いていたのか!?!」

アディンが驚いて声を上げたのも無理はなかった、龍が連れてきたウェイターこそ、東京サークルビル 35 階にある中華料理店で働いていたあの張五飛(チャン・ウーフェイ コードネーム:アルトロン)だったのである。

「ああ」

「いつ、東京から移って来ましたの!?!」

「札幌でゼネコン事件があった日からこっちへ移った、トレーズからの指示でな」

五飛が言った『トレーズ』という人物こそ『ソレスタルビーイング』の司令官であり国連事務総長ジャミル・ニートが言った『エピオン』をコードネームに持つ男である。

「そうでしたの、ところで何か収穫はありまして?」

「詳しい事はまだ調査中だが最近麻薬や覚せい剤の類が港から入ってきているらしい。税関も警戒を厳重にして取り締まっているがそれでもすり抜ける物が多いようだ」

「ああ『黄色い馬』と『シルキーキャンディ』か、噂にや聞いているぜ。確かその利益が『公平透明党』という連中の懐に入っているってな」

「そういうことだ、その出所を調査するのが俺と妹蘭の任務の一つだ」

「分かりました、ではこのぐらいにして食事に致しましょう。悪いけど頼めるかしら」

「いいとも」

「そうそう、忘れてたけど妹蘭は?」

「もう会った、この料理店にいる」

こうして話は終わり、彼らは五飛に何品か注文する。が、この店には大事な話をしている客が二名、彼らと離れた所でされていた。

6

「じゃあ行ってくるよ、恵子」

オーブ王立大学考古学教授、江島陽介は赤ん坊を抱えている妻、恵子の頬にキスをしてマンションを出る。彼の専門分野は中南米史、特にメキシコの歴史を研究しているのだ。

が彼には妻にも隠している裏の顔があった…。

「あ、お早うございます、教授」

「やあ、お早う」

キャンパス内ですれ違う大学生達に彼は挨拶を交わす。彼は愛妻家としてマンション内は勿論、近所や大学生にまで知られている好人物である。その為、特に女子大生にとって彼は憧れの的になっているのだ。無論、男子学生にも人気がある、彼の講義は分かりやすく、学生達に興味を引くようなやり方を行っているからである。やがて彼は研究室がある講堂内に入り、同じ講堂内にある事務室へ行く。彼もそうだがこの大学の講師達はここで自分達宛ての手紙などを受け取るのだ。

「お早うございます、江島教授」

「お早うございます」

彼は女性事務員の一人に挨拶をする。

「教授、お手紙が来ております」

「そうか、ありがとう」

「ただ…」

「どうかしたのかい？」

「送り主の名が書いてないんですよ。それに封筒の裏側に妙な絵があるんです」

とその事務員は彼宛の手紙を渡しながら困惑した表情で言う。確かに彼女の言うとおり、封筒の裏に絵が書いてあった。それを見た陽介は一瞬冷ややかな目つきになる。

「…教授？」

事務員が彼の目つきの変化に驚いて彼に声をかけると

「あ、ああこれね。心配ないよ、私が親しくしている学者からのものだから」

と彼は目つきを和らげて言う。

「そうですか…ならばよろしいのですが」

「そういうことだから、では失礼するよ」

と彼は事務室を出て自分の研究室に向かった。

部屋の扉には何色ものビーズと紐で出来た見事なタペストリーが飾られている。そこが彼の研究室であり、タペストリーは彼が作ったものである。

「…」

彼は自分の研究室に入り、中から鍵をかける。それから机に向かい、椅子に腰掛けて、手紙の封を切る。中に入れてあった便箋にはいろんな絵が羅列して書いてあった、実はこの絵、マヤ文字といって彼が研究しているマヤ・アステカ文明時に使われた文字である。16世紀にスペイン人のコルテスが当時のアステカ王国を侵略した後、文献が焼かれ、一時失われていたが同じスペイン人宣教師であったディエゴ・デ・ランダによって一部残され、その後の研究者達によって解説が進められた(作者註:マヤ文字に関してはWikipedia日本語版より一部引用)。彼もまた研究者の一人である為、この絵文字が読めるのである。

「…なるほど」

彼は冷ややかな表情で一人呟くと読んだ手紙と封筒をシュレッダーにかけて細かくし、更にそれを傍らの灰皿に入れてライターで火をつけて焼却した。何故、そこまで念入りに処分するのか?そう、彼が妻にも見せないもう一つの顔、それは彼が国連で秘密裏に結成された暗殺部隊『ミキストリ』の指揮官という顔だからである。先ほどの手紙はメンバーから送られた言わば暗号文書なのである。

「…」

彼は扉の鍵を開け、表に飾ってあったタペストリーを取ると再び鍵をかけて机に戻る。それから引き出しからビーズが入った箱を取り出してタペストリーの端にある結び目を一本一本解いて分解しながら事務室に内線を掛けた。

「もしもし、江島です。今日の講義ですが緊急の用事が出来ましたので休講にさせていただきますのですが…。ええ、申し訳ない…」

数時間後…

「？」

オーブ王立大学の学長であり、宇宙工学教授でもある南部孝三郎は自分の研究室に向かう途中でとある研究室の前に立っている二人の男女学生を見かけた。この二人は扉の前で話し合っている。

「おかしいね」

「うん、絶対おかしい。絵が変わってるよ、普通なら四季ごとに変わるのに」

彼はその二人に近づき、声をかける。

「君達、何をしているのだね?午後の講義なら始まっているぞ。それともこの部屋に何か用があるのかね?」
すると

「ああ、すみません。僕達、午後は講義がないんです。突然、休講になったので」
と男子学生が答える。

「?突然休講?確かそれは江島教授の…」

「はい、僕も彼女もあの人の講座を取っているんです」

そう、二人が立っていたのは陽介の研究室の前だった。

「それで、君たちは何故ここにいるのかね?」

「実は江島教授にレポートを提出しようとして来たんですが…」

「彼なら昼にはこの大学を出て行ったぞ」

「え!?そうなんですか」

「しかし君達、さっきから何がおかしいと言っているのだね」

すると女子学生が
「この扉の前のタペストリーを見てください。絵が変わっているんです」
と扉の前に指差して言う。
「?別に何ともないようだが」
「あのう、教授はいつもこのタペストリーをご覧になっていらっしゃるんですか?」
「ああ、時々目につく程度だな。あの江島君が見事なものを作るなど感心するぐらいだ」
と南部は頭を掻きながら答える。
「そうですか、実は江島教授はこのタペストリーの絵をいつもなら季節ごとに変えるんですよ、でも今日に限っていきなり変更するなんて…」
「ふ～む…」
「ルイス、あれ写真に撮ってあるだろ。あれを教授に見せたらどうかな?」
と男子学生が『ルイス』という名の女子学生に言う。
「そうだね沙慈、それなら教授でも分かりやすいから」
とルイスはそう言うと携帯電話を取り出し、それで撮影した写真の画面を出して南部に見せた。彼は目を凝らして画面を見る。
「…今飾ってあるのと絵が同じだな…!いや君達の言うとおりで、色合いといい、紐の結び目の位置といい、微妙に違っている」
「でしょ?それでおかしいなって沙慈と二人で話していたんです」
「ふむ、確かに…そうだ、君はルイス君といったね」
「はい、私ルイス・ハレヴィと言います。彼が…」
「沙慈・クロスロードです」
「沙慈…思い出したぞ、君は確か私の講義を受けていてよく前の席に座っていたね。先週出してもらったレポートは大した内容だったぞ」
「覚えていてくれていたのですか、ありがとうございます!」
『沙慈』という名の男子学生は感激する。
「まあ、それはさておきルイス君に沙慈君、その携帯の写真を私にもらえないだろうか?」
と南部が話を元に戻して二人に頼む。
「いいですよ、教授も気になりますか?江島教授のこと」
「ああ、突然休講にしたこともな…事務員にも聞いたのだがしばらくの間とか言って詳しいことも言わなかったそうだ」
「一体、何故休講にしたのでしょうか…?」
「沙慈、遺跡でも見つかったのかな?」
「だとしたら掲示板に休講する理由を書く筈だよ」
「そっか、それもそうだよな」
という会話の後に南部は自分の携帯のアドレスを教え、ルイスから自分の携帯に問題の絵が写っている写真を送ってもらい、彼自身も今飾ってあるタペストリーを携帯に付いているカメラで写真に撮ると二人と別れて再び自分の研究室に向かった。向かいながら携帯でどこかへ掛けて相手と話す。
「もしもし、私だ。ちょっと気になることがあったのでね、君に見てもらいたいものがあるのだ…ああ、今から君の所に写真を二つ送るのでよく見て調べて欲しい。必要とあらば君の所へ出向こう」

時間を昼近くに戻し、名古屋からかなり離れたところのとある森の中…。
二人の男と一人の女がこの森の中を歩いていた、どうやらこの三人は兄妹のようである。
「ねえヨハン兄い、まだ着かないの?草臥れちゃったよ」
「もう少しだ、ネーナ。我慢しろ」
「そんな事言ったらってえ…あれから 50 分ぐらい歩いてるよ」
「全く、何で目的地まで車道が通ってねえんだよ!?しんどいったらありやしねえ…」
「ミハエルまで文句を言うな、置いていくぞ」
「ぶ～、分かったわよヨハン兄い…」
「ちえっ、いい気なもんだぜ、兄貴はよお…」
この三人で一番上である『ヨハン』という男が文句を言う弟の『ミハエル』と妹の『ネーナ』を励ましながら森の中を歩いている。実はこの三人も陽介同様『ミキストリ』のメンバーであるトリニティ三兄妹であり、彼らが森の中を歩いているのはこの森の奥にひっそりと建っている屋敷に行き、『ミキストリ』の活動拠点にする為である。
「ったく、親父も親父だぜ。こんな偏屈な場所にある屋敷を拠点にしなくたってよお…」

「本当だよ、ミハエル兄い。パパは何考えてんのかしら」
ぶつくさ文句を言うミハエルとネーナを尻目にヨハンはすたすたと歩いていく。すると
「ミハエル、ネーナ、どうやら目的地に着いたようだぞ」
「え!?マジで」
「やっとかよお…」

二人が兄に追いついてその先を見ると芝生の庭園があり、その奥に目的地である古風な屋敷が建っていた。
「さて、あともうちょっとだ。屋敷に入ったら休憩するぞ」
「あ〜もう気が抜けてへたり込みたくなっちゃった」
「俺もだぜ、兄貴」
「ふう、気持ちは分かるがそこでへたり込まれても困るぞ。休憩したらやることはたくさんあるからな」
「え〜せめて休憩長く取ろうよ〜」
「人使いが荒いんだよ、兄貴は…」
「文句なら後で言え、行くぞ」
ヨハンは二人を促すと屋敷に向かって歩いていった、彼らも渋々ついて行き、三人は屋敷に入っていった。

「うわ〜、何ここ…埃だらけは分かるけど窓が少ないじゃん」
「ホントだぜ、電気通っていたのかよ…」
「懐中電灯を持ってきて正解だったな、父の言うとおりだ」

三人が入った屋敷は窓が極端に少なく、外壁は煉瓦張りですべて二階建てだった。窓が少ないので、屋敷の中は暗く、光が差し込まず少し冷え込んでいる。三人は懐中電灯で前を照らしながら屋敷の中を回る。それから厨房らしき部屋でブレーカーを見つけるとヨハンは電源を ON にしてからその前に見つけたスイッチを押す。すると明かりが点き、周りが少し明るくなった。

「よし、前もって電力会社に電気を通してもらうよう頼んでおいたからな。さてさっき食堂らしき部屋があったからそこで休憩だ」

「ああ、やっただよ…」
「お腹ペコペコお〜」

三人は食堂らしき部屋へ行き、そこに置いてあったテーブルの埃を払い、同じく置いてあった椅子の埃も払うと座って町で買ってきた弁当を取り出して食べる。

「ここが『伽羅離(ガラリ)館』ねえ…何が『ガラリ』なのかしら？」

「そういや兄貴から聞いたんだけどよ、何でも怪しげな連中が住んで宗教じみた事をやってたんだとよ」

「ふ〜ん、ここでならやりそうな事だよな。で、それと何の関係があるわけ?ミハエル兄い」

「その以前住んでいた連中は異世界に行ける能力を誰もが持っているとか言っててよ、この奥にある仕掛けでインチキ超能力を披露して異世界に行ったような錯覚を起こさせてたんだとよ」

「どんな仕掛け？」

「一番東側に通路があってその奥に部屋があっただろう、その間の通路を挟むようにして収納スペースと部屋がある。で部屋側の壁が 90 度回転するようになっていてそれを利用して被験者に異世界へ行ったように見せかけてたんだと」

「なあんだ、ただの手品じゃん。それも大掛かりな」

ミハエルとネーナは食事をしながらこの館のことで食事をしながら会話している、一方のヨハンは終始無言だ。

「それだけじゃねえんだぜ。これも聞いたんだけどよ、それ聞いた時思わず笑っちゃったぜ」

「え!?なにになに?どんな事？」

ネーナが兄の話に興味を示す。

「その超能力者なんだけどさ、殺されちゃったんだと。頭殴られて」

「プッ、アハハハハ…、馬鹿じゃんソイツ。超能力者のくせに殺されたの!?アハハハハハ…」

「だろ、笑っちゃうだろ、尤もソイツもインチキだったから当然だけどさ」

「ホント、鈍感もいいところね」

と二人が話していると

「ミハエル、ネーナ、楽しんでるところを悪いが休憩は終わりだ」

とヨハンは食事を終えて言う。

「え〜!?もう終わり？」

「もう少し長く取ろうぜ、唯でさえここまで歩いてクタクタなのによ」

「おいおい、『死神』たる俺達があんなことで根を上げてどうする。訓練だって過酷だった筈だぞ」

「チッ、分かったよ。で、何すればいいんだ？」

「まずは掃除といきたいところだが俺達にはここは広すぎて手がかりすぎる。確か、二階の部屋にパソコンや機械類があったな。その動作チェックはネーナに任せる、ミハエル、お前は通信機器のセットを持ってきたら、あれを取り付けろ。俺は父に連絡したらお前を手伝う、掃除は必要最小限の箇所のみとする」

「は～い、了解ヨハン兄い」

三人はそれぞれ作業を始めた。

時間は夕方、場所は赤穂…

この市民会館に陽介がいた、何故そこにいるかというあの手紙の中にコンサートのチケットも入っており、そこでメンバーと待ち合わせすることになっていたからである。因みにコンサートを行うのはオーブ国立オーケストラであり、その首席指揮者であるブルックという男は千秋真一とはライバル関係にある。

陽介はホールの奥の席に座る、するとその隣に一人の女性が座り彼に目配せをする。実は彼女も『ミキストリ』のメンバーで名をテリーナ・ヤーセンと言い『ヴァルキューレ』をコードネームに持つ。

因みに陽介のコードネームはアステカ神話の太陽神『ケツアルコアトル』であり、テリーナは主にメンバー同士との連絡役を務める。

「…」

コンサートが始まって少したったところで陽介は彼女の手の甲に指で何かを描く。彼らも秘密組織の為、会話だと盗聴される可能性があるのこうした連絡法を取り合っているのだ。

「…」

彼女も無言でハンドバックから小さく折り曲げた紙を取り出すと誰にも気づかれないようにそっと陽介に手渡した。しばらくして陽介は席を立つとトイレに行き、個室に入って戸を閉める。そこでテリーナから渡された紙を広げた。そこにはマヤ文字ではなく、ルーン文字という北欧で使われていた文字が書かれていた。陽介はスマートフォンを取り出す、このスマートフォンは『ミキストリ』特別仕様であり、一見一般の物と同じであるが機能は格段上だ。

「…」

彼は耳を澄まして誰もいないことを確かめると紙の内容を携帯で写真に撮り、紙をトイレに流した。この紙は水に溶けやすい材質で出来ており、これを使用しているのは無論機密情報が漏れないようにするためである。その後彼はトイレを出てホールに戻るとテリーナと共にコンサートを見続ける。

「…終わった？」

彼女が小声で声を掛けると

「ああ、後で見る」

と彼も小声で答えた。

その二日後、場所はゼーラ帝国内にある鳥取空港…

CP9 製薬常務ロブ・ルッチは秘書のカリファ、広報部長クマドリと共に人を待っていた。ルフィが辞めていった日に来日すると言ってきたウィルス研究第一人者である教授を迎えに来たのである。

「…来たか」

ルッチが税関に目をやると肌が特別白い男と日本人らしき男、それに黒い服を着た小さな男の子が彼らに向かって歩いてきた。小さな男の子の手には横に窓がついた手提げ鞆を持っている。

「ヨヨイ!あ、お待ち～申上げて～あ、おりましたあ～」

クマドリが彼らに歌舞伎風に挨拶すると

「やめなさい、クマドリ。子供が怯えちゃってるわよ、貴方の大げさな挨拶に」

とカリファが静かな口調で彼を嗜める。

「ヨヨイ!あ、これは～失礼～え、つかまつったあ～」

「お前、カリファの言っていることが分からなかったようだ。黙ってろ」

とルッチが鋭い視線を侘びを入れたクマドリに向けて彼を黙らせると

「どうもお騒がせして申し訳ありません。ロキ・スチュアート教授ですね、私は CP9 製薬常務のロブ・ルッチと申します」

と三人に挨拶する。

「ご丁寧にも、私がロキ・スチュアートです。で、こちらが私の執事である」

「闇野竜介と申します」

ルッチの挨拶に答え、二人の大人が自己紹介する。

「こちらの男の子は？」

とカリファが尋ねると

「ああ、この子は私の息子です。Jr.(ジュニア)、ご挨拶しなさい」
とロキが男の子を紹介し、息子に挨拶を促す。が Jr.は先ほどのクマドリの挨拶に怯えていたせいか、闇野の後ろに隠れてしまった。

「坊ちゃま」

「どうも申し訳ありません、息子は人見知りでしてな」

「いやなに、クマドリの挨拶の仕方に怯えたのでしょう、お気になさらないで下さい。さあ参りましょうか、社長が首を長くしてお待ちしておりますので。クマドリ、教授の荷物を持て。ああ、ついではながらお前はこれから一切喋るな。教授のご子息が怯えては困るからな」

「ワンワン!」

と Jr.の持っている鞆から犬の鳴き声がする。

「あら、ボク犬を連れてきているの?」

とカリファがしゃがんで Jr.にやさしく声を掛けると彼は数秒おいて頷く。

「かわいいわねえ、名前は何てつけてるの?」

「…フェンリル」

「そう、フェンリルちゃんっていうの。ねえ、よかったらお姉さんがフェンリルちゃんがいる鞆持ってあげようか?」

しかし、彼は鞆を後ろに回すと首を横に振って拒否する。

「坊ちゃま、せっかくこのお姉さんが仰ってるのですから」

「…いやだ」

「そう、ごめんなさい。じゃあ行こうか」

とカリファは微笑みながら言うのと立ち上がり彼らの前を歩く、無論客人である三人もついて行く、その途中だった。
(?あれは)

ルッチが視線を横に向けると一人の女性が目に留まった。その女性に見覚えがあるのか彼は立ち止まり、女性の後ろ姿を見ている。

「どうしたの?」

「カリファ、すまないが先に教授達と共に行け。あの女、もしかすると」

「何?あの女がどうかしたの?」

「あの男の娘かもしれん、いや十中八九間違いない。厄介なことになった」

「あの、どうかされましたか?」

と闇野が尋ねると

「いや何、こちらのことです。失礼ながら私は急用が出来ましたので…、カリファ、教授をお連れしろ」

「ええ、分かったわ」

と話してルッチは集団から離れ、人ごみに紛れる。彼は女性に気づかれぬように彼女を観察すると携帯を取り出して掛ける。

「もしもし社長、あの女が帰ってきました。ええ間違いありません、まぎれもなくノリエガの娘です…」

そう、ルッチが見かけたのはあの『ソレスタルビーイング』のメンバーの一人、スメラギ・李・ノリエガであった。しかし、CP9の面々はもう一つのことには気づいてなかった。彼らが迎えたロキ・スチュアートと闇野竜介も国連の人間の一人であり、秘密暗殺部隊『ミキストリ』のメンバーでロキは『スレイプニル』、闇野は『ニーズヘッグ』というコードネームを持つことを、そして彼らの標的が CP9 であることも…。

7

「な…!それは本当か!?!」

コンピュータープログラマー、リー・ケフレンは目の前の男から話を聞いて血の気が引いた。たった今、目の前にいる話し相手であるガジャから自分が作ったセキュリティソフト『ラー・デウス』が破られたというのだ。

「ああ本当だ、ケフレン。あのソフトを使い、わしの研究していた薬のデータを保管していたのだが…わしの管理が疎かだった故にセキュリティは破られ、研究データを盗られてしまった…すまぬ」

ガジャはケフレンに頭を下げる。すると

「許せガジャよ!あれはまだ試作品だったのだ!そのテストをお前が引き受けてくれたとはいえ不完全な試作品を安易に渡してしまった私の責任だ!!」

とケフレンは椅子から滑り降りてガジャに土下座した。

「な…、何を言うのだ!ケフレン!これはわしにこそ責任があるのだ。そもそもテストをやらせてくれるよう頼んだのはこのわしだ、それにあれが試作品だった事を忘れた上にあれのセキュリティ能力の高さに満足して頼りきったわしが愚かだったのだ!」

「…ガジャ」

「もういい、ケフレンよ立ってくれ。あの『ゴーレム』、いや『ゴードム』が不完全な形で出回ってしまった以上、わしはあの開発者として何としてでもあれを上回り、しかも副作用を抑えた新薬を作らねばならぬ。さもなくば、あれの副作用による被害は拡大する一方だ」

「私を許してくれるのか」

「当たり前だ!わしとお前は大学時代からの仲ではないか。許す許さぬの問題ではない」

この二人はアメリカのコネル大学に留学していた事があり、ガジャは医学をケフレンは電子工学を学んでいた。その中でお互い知り合い、意気投合して友情を築いたのだった。そして二人は共に日本に渡り、研究者として活躍していたのだ。

「分かった、こうなれば私もあれを急いで完成させねばならなくなった」

とケフレンは立ち上がって椅子に座りながら言う。

「あれ…おお!『あれ』か!お前が『ラー・デウス』の上をゆく物として開発している…」

「そうとも『あれ』だ、『デウスーラ』だ。今までお前が送ってくれたテスト結果を元に組み直したソフトだ」

元々『ラー・デウス』は十五年前、ロシアが開発し、一度テロリストに奪われた軍事用のハッキングソフト、『ゴールデンアイ』をベースにして開発されたセキュリティソフトであった。この『ゴールデンアイ』、一度軍事衛星に搭載すると全ての電子機器にハッキングしてその支配下に置くというとてもない代物であった。それ故、その危険性にいち早く気づいたイギリスの諜報機関 MI6 は切り札であるあのジェームス・ボンドにこのソフトを奪回させ、厳重に保管したのであった。しかし四年前、何者かによってこのソフトが流出してしまい、それが流れに流れてケフレンの許にきたのだった。

「あれを完成させる為にはガジャ、お前の協力が必要だ…。そうだ!ガジャよ、お前 CP9 をクビにされたと言ってたな?」

「ああ、そうだが」

「丁度いい、もしお前にその気があるならば私が勤めているアカデミアに来ないか?お前も『ゴードム』の被害を抑える為にそれを上回る新薬を造りたいのではないか。アカデミアなら薬の開発研究施設もあるからそこでやれる筈だ」

アカデミアとはオーブが小豆島近くにある小さな島に設立した総合学術研究所のことである。オーブ先代の王ウズミが将来を担う学者達の為に設立し、工学・医学は勿論、政治学の研究までできる所である。ケフレンも最初は関西地区のとあるコンピューター企業の下で働いていたが彼の才能を聞きつけた研究所所長、星研三博士にスカウトされてアカデミアに移籍したのだった。因みにアカデミアは島に広大な敷地を所有している為、研究所のある島は『アカデミア島』と呼ばれるようになった。

「このわしにか!?ありがたい!これからの行く宛てに困っていたところだ。お前の力になり、しかも新薬開発に力を注げるのならわしは藁にでも縋りたい思いだ」

「そうか!来てくれるのか!よし!そうと決まればお前を受け入れるよう所長に頼んでみよう。あそこは学術向上の為の研究施設と言ってよい、優秀な助手も数多くいる。なるべく早めにお前をスカウトしたかったのだが」

ケフレンの誘いに喜んで応じたガジャの答えに彼は少し興奮しながら喋る。

「そうか、そんなに素晴らしい所か。この神戸に来た甲斐があったな」

とガジャも嬉しそうに言う。一方のケフレンは急に真顔になると

「ところでガジャよ、もう一度尋ねるが『ラー・デウス』が『いとも簡単』に破られたと言ったな?」

とガジャに尋ねる。

「ああ、最初に言ったとおりだが…何か思い当たる事でもあるのか?」

「ウム…もしかすると…」

「もしかすると、何だ?」

「いや、ここでは話せない。これは『ラー・デウス』に関しての機密なのでな…」

と彼は言うともた顔を緩め

「それよりも今日は大いに飲もう、親友同士の再会とお前がアカデミアに来てくれる事を祝おうではないか!」
と言う。

「そうだな!飲もう!」

こうしてガジャは自分の新たな新天地としてアカデミアに行く事になった。

時間を少し遡らせ、場所は東京…

一台のタクシーが五車星出版社の前で止まり、中から三人の女性が出てくる。一人は 20 代らしき女性で運賃を運転手に支払っている、もう一人は蜂蜜色の髪をした少女、そしてもう一人は二番目の少女より少し幼く緑色のベレー帽をかぶっている。

「ここね、リリーナがオーナーの会社って」

とベレー帽の少女が蜂蜜色の少女に尋ねる。

「ええ、そうよマリーメア」

と『リリーナ』と呼ばれた少女はにこやかに答える。その間に運賃を受け取ったタクシーは去っていく。

「リリーナ様、参りましょうか」

と運賃を支払っていた女性が言うと

「ええ。マリーメア、行きますわよ」

と看板を見上げていた『マリーメア』という少女に『リリーナ』という少女が言い、会社の中に入っていく。この『リリーナ』という少女こそソレスタルビーイングのメンバーであり、五車星出版社の筆頭株主の一人であるリリーナ・ピースクラフト(コードネーム:ピースミリオン)であり、最年長の女性の名はルクレッツィア・ノイン(コードネーム:トーラス)、そしてベレー帽をかぶった少女がソレスタルビーイング指揮官トレーズ・クシュリナーダの娘、マリーメア・クシュリナーダ(コードネーム:サーペント)である。

「お待ちしておりました、リリーナ嬢」

リリーナ達が事務室に入ると社長のシュウが出迎え、彼女達と共に社長室へ行き、部屋にあったソファに向き合って座る。

「早速ですが…」

「ええ、壬生国はあと一週間で選挙でしたわね」

「はい、ですがそこでかなりの不正が行われているというのは以前お話いたしましたとおりです」

「ええ、伺いました。麻薬がらみの裏金が動いているそうですわね」

「はい、その金はこの関東連合の議員も恩恵に預かっているらしいのですが…そここのところの証拠はまだ調査中です」

「そうですか…まだつかめないという事はおそらくルートは一つではないということですね」

リリーナは考える顔だ。

「そういえばシュウ社長、その議員達からの妨害はあったのですか？」

とノインが尋ねると

「直接は今のところはありませんが、一人の検事が例の薬害疑惑に関する調査から手を引くようにと言われたそうです」

「この会社には直接抗議は無かったのですか？」

「ええ、拳志郎君が追っている薬害疑惑に対してのビアス氏の記者会見があったぐらいで」

「そうですか、ですがそろそろ何かあってもおかしくはないですね」

ノインも考える顔だ。

「ところで新聞で知りましたが、この国の議会は壬生国選挙に出馬した候補を密かに支援していると聞きました」

とリリーナは話題を変える。

「ああ、喪黒福造氏の事ですね。確かに与党のギレン氏は彼と密かなつながりがあります。どちらもアメリカ寄りですから親米派としてアメリカとの提携を濃くするでしょう」

「やはり…グローバル・スタンダードの名のもとに日本連合国も…」

「ええ、また連合国になる以前の状態に逆戻りする事になります」

リリーナもシュウも暗い顔になる。すると

「何言ってるの、その為の私達でしょ?リリーナ」

とそれまでお茶を飲んでいたマリーメアがさらっと言う。

「ええ、そうねマリーメア」

とリリーナが顔色に明るさを取り戻して答える。

「?何の事です?」

とシュウが疑問を投げかけると

「いえ、私達はジャーナリズムの会社の株主としてここへ来たという意味で彼女が言ったものですから」

とリリーナが答える。

「そうですか…」

「とにかくシュウ社長、私達はしばらくこの国に滞在しますので何かあれば仰って下さい。すぐに参りますので」

とリリーナ達は話を切り上げると出版社を後にした…。

場所は代わって…

ここはオーストリアにあるブラウナウ・アム・インという小さな町。

この町から五分ほど離れた所に小さな邸宅があり、一人の男がテラスで優雅に紅茶を飲みながら外の風景を眺めていた。そう、この男こそソレスタルビーイングの司令官トレーズ・クシュリナーダである。

「トレーズ様、トールギスから連絡が入りました。MS全機日本に入国したそうです」

眼鏡をかけた女性がトレーズに近づき、報告する。彼女の名はレディ・アン、トレーズの妻である、因みに彼女のコードネームは『アクエリアス』である。

「そうか、ご苦労。それにしてもいつ見てもいい景色だ」

とトレーズは目を外の景色に向けたまま言う。

「はい、ですがこの景色の外に行けば人の欲望が渦巻いています」

「その通りだ、レディ。だがこの町も外の世界とは決して無縁ではない」

「…はい」

「そういえば丁度いい時間だ。レディ、君もここでお茶でもどうかね？」

と彼はレディを紅茶に誘うと

「はい、ではいただきます」

と彼女は微笑んで彼と向かいあわせに座った。トレーズはテーブルにあったベルでメイドを呼ぶとレディの分の紅茶を用意させて下がらせた。

「ところでレディ」

「はい」

「さっき私は『この町も外の世界とは無縁ではない』と言ったが、その意味が分かるかね？」

「はい、もちろんですともトレーズ様」

「ではこの町がどういう所なのか改めて説明してくれたまえ」

「はい、この町はあのドイツの独裁者にして第二次世界大戦の引き金を引いたアドルフ・ヒトラーの生誕地であります」

「うむ」

「あの男は父親であるアロイスからかなり厳しく躰けられ、画家の道を志望するも父親から大反対されたそうです」

「…」

「その後画家を目指すも挫折し、第一次大戦で従軍、戦後は『ドイツ労働者党』という小さな政党に入党し、そこで演説者としての才能に目覚め、無職だった頃に書物で覚えた民族主義や反ユダヤ主義を提唱して政党を拡大し、あの悪名高い『ナチス(正式名称:国家社会主義ドイツ労働者党)』に党名を変更、遂には政権を獲得し、ユダヤ人・身体障害者・ロマ族(作者註:『ジプシー』の呼称が有名だが彼らにとっては偏見の言葉となっている)に対する虐殺(通称:ホロコースト)や戦争行為を行った事はトレーズ様もご存知のとおりです」

(作者註: アドルフ・ヒトラーとロマ族に関してはWikipedia日本語版より引用)

「ありがとう、上出来だ。私がこのブラウナウ・アム・インを本拠地にしたのもあの男のような狂気の人物を反面教師として戦争を根絶する為だ。事実、この私もあの男のようになりかけそうになったこともあったのだからな」

「…トレーズ様…」

かつてトレーズはクシュリナーダ家で一族の相続争いに巻き込まれて、しばらくの間監禁されていた事があった。しかしその後相続争いは収まり、彼は自由の身になっただけでなく、クシュリナーダ家を相続する事ができたのだ。彼が言っていた『この私もあの男のようになりかけそうになった』という台詞には彼のつらい過去の記憶が込められていたのだ。

「だが、私にとって幸いだったのはこのソレスタルビーイングの創設を提唱したイオリア・シュヘンベルク氏と叔父上を通じて知り合えた事だ。もうかれこれ十五年も前になるかな」

トレーズにはデルマイユ公爵という叔父がいた。彼はロームフェラ財団の総裁で主に平和維持活動に貢献していた。十五年前、トレーズはこの叔父の家で行われていたパーティーで彼を通じて、当時国連平和大学の教授であったイオリア・シュヘンベルクと知り合い、彼の提唱する国連直属の査察機関の創設に共感したのだ。その後イオリアは八年前に脳卒中で亡くなり、トレーズは国連機関の職員となってロームフェラ財団の後援のもとにソレスタルビーイングを創設したのだ。

「トレーズ様、あの頃は私も貴方様の秘書にすぎませんでした。でもあの頃の貴方様はイオリア教授にお会いなされた時の目の輝きは今でも覚えております。私も教授の提唱に共感しましたから。そして…そのこの組織が創設された後です、私を妻として迎えたいと仰られたのは」

「そうだなレディ、私は君と共に平和を楽しもうと思った。そして君との間にマリーメイアが産まれた。その我が娘に私は過酷な道を歩ませようとしている、それも我々大人の欲望が渦巻く中に…」

「…」

「その欲望が時には戦争を引き起こす要因ともなる。いつになれば我々人類は己の欲望をコントロールできるのか…」

「ですがトレーズ様、その為のこの組織ではありませんか。あの狂気の独裁者のような人物を抑える為にも」

「そうだなレディ、マリーメアに幸福な人生を送らせる為にも今回のミッションを無事に終わらせないと。ただレディ、状況によっては我々も日本に飛ぶ必要がある。いつでも行けるようにしておいてくれ」

「はい、トレーズ様」

「お待ちしておりました、ガジャ博士。私が所長の星です」

ケフレンと共にアカデミア総合学術研究所を訪れたガジャは所長の星博士から出迎えを受けた。

「ご厄介になります、星所長。このわしを受け入れてくれた事に感謝します」

「例の『ゴードム』の一件はケフレン博士から聞きました。企業側の方針で未完成のまま薬が市場に出回ってしまいましたな」

「はい、彼から聞いていると思いますがあれは副作用が強すぎます。ともすれば死者が出る事だってありうるのです。わしはそれを企業側に何度も言ったのですが…、データを盗み出されてしまいました、わしの管理が甘かったばかりに」

とガジャはジャケットのポケットから物を取り出して星に見せる。

「それは…」

「『クリプテックス』という、かのレオナルド・ダ・ヴィンチが発明した機密保持用の容器です。無理やり開けようとするとその中の情報が消えて読めないようになっております。わしはこれとケフレンが開発した『ラー・デウス』の二段構えでデータを管理しておりました」

「なるほど、しかし失礼ながら率直に言わせていただくがそれを見事に破られてしまった…」

「ええ、仰るとおりです。ケフレンはそれを聞いて土下座までした、自分の造ったソフトを安易にわしに渡した事に責任を感じて…」

「…」

「ですが先ほど言いましたがわしの管理の甘さでこうなってしまったのです。わしにも安全な薬を造るという責任もあります。こうしてこのアカデミアに受け入れてもらえたからには新たな薬の開発に心血を注ぎます」

「貴方の仰る事はよく分かりました、では施設をご案内いたしましょう」

と星が言ったところへ

「所長、案内は私がしましょう」

とケフレンが一人の女性と共に話しかけてくる。

「おお、ケフレン博士。でしたらお願いできますかな？貴方とならばガジャ博士も気がねなくこの施設の事を知る事ができるでしょう」

「わしからも頼む。ところでケフレンよ、傍らの女性は一体誰だ？」

とガジャが女性について尋ねると

「ハハハ、この子かね？私の娘のネフェルだよ。今は私の助手を務めておる」

「おお、覚えがあるぞ。前に再会した時に写真で見せてくれたなあ、あの頃はまだ小さくてかわいい子じゃったが大きくなられたなあ」

と彼が目を細めて言うと

「初めまして、父から貴方のことは聞いております。父共々よろしくお願いいたします」

とネフェルはにっこり笑って挨拶した。

「アンタがガジャ博士か…」

アカデミア研究所の施設の一つ、薬学開発研究室で男二人、女一人の研究員達がここへ来たガジャを見据える、その内の一人はガジャを睨みつけていた。

「そうとも、彼が私の親友でありこの研究室の責任者となるガジャ博士だ。ああ、お前にも紹介しておこう、この研究員の月形剣史君、仙田ルイ君、そして尾村豪君だ」

とガジャを案内しているケフレンがお互いを紹介する。ところが

「ふざけるな!!俺は知ってるぞ、アンタが開発して市場に広めた薬が未完成同然なうえにひどい副作用があることも。その薬のせいで…母さんは…母さんはひどい発疹で苦しんでいるんだ!!」

と研究員の一人である尾村がガジャに掴みかかる。

「やめるんだ尾村君!!あれは…」

とケフレンが止めようとする

「言うなケフレン。…尾村君と言ったね、確かに君の言うとおりのあれはわしが開発したものだ。どういう理由であ

れ、君の母親に使用してしまった事に対しても現にあの副作用で苦しんでいる病人に対しても全ての責任はこのわしにある。憎んでくれてもかまわん」

とガジャは静かに尾村に語りかける。

「……」

「だがな、わしはあの薬を市場に出してしまった以上、それを上回る薬を作りたいのだ。例え、一生許されなくてもだ…それがわしにとっての償いだと思っておる、だからここへ来たのだ。月形君、仙田君、君達にも頼む、わしにここで償いをさせてくれないか？その為にもあつましいようだが君達にも協力してほしいのだ…頼む」

ガジャは三人に対し頭を下げて頼む。

「……」

「豪、もう離してやれ。この人は心底から責任を感じている」

「そうよ豪、それにあの薬は販売元の CP9 が無理やり市場に出させたという噂まであるわ。それが本当ならこの人も被害者よ、許してあげて」

「私からも頼む、尾村君。あの一件には私が開発したセキュリティソフトも絡んでいる。彼は私の試作品に薬のデータを管理させたが破られて盗まれたのだ。それ故、私にも責任がある、彼を憎むなら私も憎んでくれてかまわない」

剣史、ルイ、ケフレンの説得に

「…分かったよ、どうやらアンタいえ貴方は本当に責任を感じているようだ。あのピアス教授とは違う、それだけは言える」

とガジャに掴みかかった手を離す。

「ピアス？…まさか、あの塔和大学の学長になった…あの？」

「はい、彼は僕達三人にとって大学での師です。ですが CP9 のスパンダムの悪事に加担して奴の手下に成り下がってしまいました。僕達はあの人に愛想をつかしてこのアカデミアに来たのです。因みにスパンダムは僕達と同期です」

「なんと!あの二人が君達と…何たる因果だ…」

「とにかくだ、このガジャ博士の新薬開発に力を貸してくれ。二度も言うが私からも改めて頼む、このとおりで」

とケフレンが頭を下げて頼むと

「分かりました、先ほどはひどい事を言ってすみませんでした。貴方をここの責任者として歓迎いたします」

尾村が三人を代表してガジャと握手した。

「そういえば…」

「ん?どうした」

薬学研究室を出たガジャはふと神戸でケフレンが言っていたことを思い出した。

「ケフレン、お前『ラー・デウス』が破られたと聞いた時、何か覚えがあるような口ぶりをしていたな。あの時は言えなかったみたいだが何か心当たりでもあるのか？」

「ウム、ここでなら言えるだろう。実はな、あの『ラー・デウス』はあるハッキングソフトをベースにして全てのハッキングに対して強力な防衛ができるように開発したものだ」

「そのハッキングソフトとは？」

「すまぬがそれはお前にも言えない。このアカデミア最高機密なうえにある所から外への流出は勿論、口にも出さないように言われているのだ」

「そんなに恐ろしい代物か…で、それとあの事と何の関係がある？」

「これは私の想像だがもしかすると『ラー・デウス』を破ったのはさっき言ったハッキングソフトの強化版かもしれない」

「何!?しかし、あれは流出を厳しく戒められているのではないのか？」

「そうだ、だがもし例のソフトが他のルートで流出していたとしたら…それもここからではなく別の所から…」

「?どういうことだ?このアカデミアに最初からあったものではないのか？」

「ああ、詳しくは言えないがあれはとあるルートから流出してきた物だ。偶然ここに流れ着き、あれには星所長も脅威を抱き、私に『ラー・デウス』を開発するよう要請したんだよ。星所長だけではない、オーブ王室もあれのデータを見たとき『本来ならばあれは完全抹消すべきものだ』と恐れを抱いていた」

「ウム…核兵器を所持したようなものか…」

それきり、二人は沈黙しながら施設を回った。だがケフレンの予想は当たっていた、『ゴールデンアイ』はアカデミアにあるだけでなく、もう一箇所にも流れ着いていた。後に二人は愕然とすることになる、ケフレンが言っていた『ゴールデンアイ』の強化版いやマイナーチェンジ版のソフトこそあの CP9 に依頼され、ガジャからデータを盗んだ四人組の少女探偵所持のハッキングソフト『ゴージャーン』だったことを…。

編集者あとがき

我が盟友 Neutralizer の作業は時間をかけた作業のため、これまでの関係した話を PDF ファイル化して公開しています。

権力には腐敗が必ずつきもので、マフィアなどその一部に過ぎません。以前新生活日記の書評で後藤組の組長だった後藤忠政氏の「憚りながら」(宝島社文庫)を取り上げましたが中身を読んで愕然としたほど権力と闇社会の癒着は凄まじい物を感じます。その一方で日本のごく一部ではありますが影響のでかい、かつ無責任な経営者共が中小企業をちり紙同様に使うひどいコスト削減がまかり通る有様です。

それではどんなに鞭を叩いても泣かず踊らずなのが実態でしょう。ましてや大企業が中小企業を傘下に収めて支配するわけですから、大企業がコケればそれにつられて中小企業がすっこける仕組みです。だから、正規雇用による内需拡大が必要なのです。TPP では絶対に景気は良くなりません。

ここでひとつ、お詫びがあります。

8 話(まとめ)にて参考にした作品がひとつ抜けていました。

「その恋は実らない」(C)武富智・集英社

今回使った作品

『スーパー戦隊シリーズ』:(C)東映 1986・1988・2003・2006・2008

『ONE PIECE』:(C)尾田栄一郎/フジテレビ・東映アニメーション・集英社 1999

『二人はプリキュア Splash Star』:(C)ABC・東映アニメーション 原作:東堂いづみ 2006

『ロバート・ラングドン』シリーズ (C)ダン・ブラウン

マクロス 7 (C)ビックウエスト 原作 河森正治、脚本 富田祐弘・大橋志吉・隅沢克之・アミノテツロー 1994

『機動戦士ガンダム』シリーズ:(C)日本サンライズ・創通エージェンシー

1979・1986・1988・1989・1991・1995・1996・2007

『北斗の拳』:(C)原哲夫・武論尊・NSP 1983

『ツバサ クロニクル』:(C)C LAMP・NHK・ビートレイン 2003

『パタリロ!』:(C)魔夜峰央・東映アニメーション 1978

『相棒』:(C)東映・テレビ朝日 2000

『ミキストリ-太陽の死神-』 (C)巻来功士 1990

『科学忍者隊ガッチャマン』(C)吉田竜夫・タツノコプロ/フジテレビ 1972

『T(タウ)になるまで待って』(C)森博嗣 2005

『魔探偵ロキ RAGNAROK』 原作:木下さくら (C)スタジオディーン/テレビ東京 2004

『のだめカンタービレ』:原作 ニノ宮知子・講談社 (C)J. C. STAFF/フジテレビ 2001

『北斗の拳』:(C)武論尊・原哲夫/東映映画 1983

「美少女戦士セーラームーン」(C)武内直子・講談社